

第4回名桜文学賞受賞作品集



第四回 名桜文学賞受賞作品集

第四回名桜文学賞受賞作品集 目次

小説部門

最優秀賞	該当なし
奨励賞	溶けないかき氷
奨励賞	落ちて、た
	狩俣 啓／1
	山田 31

詩部門

最優秀賞	虚夢に黎明を告ぐ	浅瀬 小夜／57
奨励賞	コドモノヒンコン	あさとよしや／61
奨励賞	ときに	藍原 知音／65
奨励賞	チョコレート工場	瑠川 キヨ／69

短歌部門

最優秀賞	人新世の示準化石	安里 和幸／73
奨励賞	祭り	玉城きみ子／74
奨励賞	大きな陽のごと	神村 洋子／75
奨励賞	明滅するパルス	元澤 一樹／76

エッセイ部門

最優秀賞	十ぬ指やいぬたきやねえらん	當銘 学／79
奨励賞	平和への祈念 集団自決を心に刻んで	琴森 戀／86

俳句部門

最優秀賞	地球忌	安里 和幸／93
奨励賞	島に生まれる	外田 さし／94

琉歌部門

奨励賞 ジュゴンと恩納森

奨励賞 鶯の初音

奨励賞 白き骨

最優秀賞

奨励賞

奨励賞

田中 直次／95

花木 詩香／96

本村 隆信／97

宮城 里子／99

大城 和子／100

前原 武光／101

當銘 学／103

最優秀受賞者
コメント

エッセイ部門

選評

小説部門

詩部

短歌部門

エッセイ部門

俳句部門

琉歌部門

小嶋 洋輔／105

屋良健一郎／116

おおしろ建／121

小嶋 洋輔／124

屋良健一郎／132

波照間永吉／137

玉代勢 章／109

西原 裕美／118

吉川 安一／129

小番 達／126

おおしろ建／134

照屋 理／140

あずさゆみ／112

吉川 安一／129

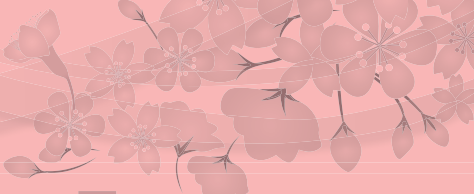
※巻末に募集ポスター、記念写真を掲載

表紙

『あけの海』

原画デザイン
ステンドグラス製作

帆足デザイン研究所
沖縄ステンドグラス



小説部門

奨励賞

溶けないかき氷
落ちて、た

狩俣
山田

啓／1
／31



小説部門

奨励賞

溶けないかき氷

狩俣 啓

あの子は何味のかき氷が好きなんだろう。

真四角の窓の外に広がった、全てを飲み込んでくれそうな青すぎる空を見ていたら、ふとそんなことを考えていた。

空の広大なキャンバスに、あの子の顔を描く。思い浮かべるのは、いつも同じ表情だった。わずかに口角が上がった微笑み。その顔をいつ見たのかは忘れたけど、ずっと頭から消えずに残っている。

君は、何味のかき氷が好きなの？

気軽にそう問えたらいいのにな。簡単に聞ける関係性だったとしたら、間違いなく毎日が楽しいだろう。

プリントに目を落とした。こんな問題の正解なんて、少し考えたらすぐに分かる。でも、君の

好きなかき氷の味は、僕には一生分からないままなんだろうな――。

「お前それは盛ってるって！」

耳の機嫌を損ねる低い声で、陳腐な哀愁から心が引き戻された。

「いやマジだって、マジ」

僕の右の方、教室のドアにほど近い席で里田と北村が笑っていた。街中でよく、他人が大声で笑っているのを聞くと嫌悪感を抱くが、嫌っている同級生の笑い声はそれ以上に不快だ。

うるさい、迷惑だ。これでは勉強に集中できない。問題を解く手はさつきから止まっているが、心の中で悪態をつくのが止まらない。解き進めようにも、集中できないしやる気も出ない。右手に握られたグレーのシャーペンは、本来の役目を果たすことなくずっと手の上でペン回しをされている。普段からこんな調子だから、せつかくの夏休みだというのに学校に来ないといけなくなつたんだろう。

隣の教室の奴らが僕とあいつら二人を見たらどう思うだろう。あまりの不真面目さに驚くのか。それとも、怒りながら、大学受験において夏休みの期間がいかに大事かを説いてくるだろうか。どちらにしてもきつと分かり合えないな。夏休みにわざわざ好き好んで学校に来て、講習を受けるようなって考える奴の気が知れない。

隣の教室には、夏休みの受験対策講座を自ら受けて来た、いわば受験に対しストイックで、簡単に言えば真面目な生徒たちがいた。一方で、この教室にいるたつた三人の僕とあいつら二人は、自分から学校に来た訳でも受験に対し熱意を持っている訳でもない。成績が悪く、無理やり補習

を受けさせられている問題児だ。

同じ「夏期講習」という名前でも、その中身はまるで違う。歳は変わらないのにここまで差があるというのは、何とも不思議だ。

小学生でも分かるぐらいにはつきりと差別化された二つの教室で、「勉強ができない組」に分けられた僕は、更にやる気を失っていた。「あなたは成績が悪いのでここで勉強してください」とストレートに言われ、「よしやるぞー!」と頑張れる人などいるのだろうか。もしそんな風に頑張れるとしたら、最初から勉強のできない組には入っていないのではないか。

僕のその推測は正しいらしく、現にこの夏期講習という名の補習が始まってから、ずっとモチベーションは日本の景気みたいに低迷し続けていた。最近の日本の景気が良いのか悪いのかも知らないけど。

生徒に問題アリなら、先生も例外ではなかった。教室の前方、僕らが使う机より高く大きい教卓があるが、そこに居るべき人はいなかった。使用主を失った教卓にはいつもの存在感が見当たらず、しおれた花みたいに小さく感じられた。

この補習が始まって今日で一週間だが、初日はもちろん先生がいた。最初から最後まで、教卓に座って面白いのか面白くないのかよく分からないような顔で本を読んでいた。確か表紙には「ノルウェーの森」と書かれていた気がする。

三日目に先生は途中でどこかへ行った。僕たちがプリントに取り組んでから二十分もすると、突然「そのまま続けていなさい」とだけ言い残し不真面目クラスから出ていった。それから補習

が終わる時間まで戻ってくることはなかった。最後の十分前ぐらいに戻ってきて、再び教卓に座っていた。その日に解いたプリントを提出したとき、「はいお疲れさん」とか言って、いかにもずっと僕らを見ていたみたいな言い方が気に入らなかった。安直な劳いの言葉とともに臭いコーヒーの匂いが漂ってきて、クーラーのよく効いた職員室で湯気のたつコーヒーをすする先生の姿が浮かんで、さらに腹がたつた。

僕の中で先生の株はかなり下がって、地面スレスレの位置を何とか保っていたけど、ついに今日地面に突き刺さった。

補習が始まってプリントを配った途端、先生は教室を出ていってしまった。ただ適当に、「やるときなさい」なんて言葉を雑に投げ捨てて去っていった。あまりのやる気の無さに僕はあつけにとられ、先生が教卓を離れドアを開けて出ていくまでの一部始終をついで目で追ってしまった。間拔けに口を開けながら。

急いで教室を飛び出して追いかけて、仕事を放棄した情けない背中に向かつて「あんたそれでも教師かよ!」と叫んでやりたかったが、どう考えても僕のキャラではそんなことできなかった。ツイッターに書き込むぐらいが似合っている。

監視役がいなくなり、良い言い方をすれば生徒の自主性が尊重される空間になったこの補習教室は、完全にだらけきっていた。僕はだらだらとプリントを解き、二人はずっと喋り続けている。その喋りのせいでどれだけ僕の集中力が削がれているか、プレゼン資料でも作ってステイプ・ジョブズみたいに発表してやりたい。

まるで、教室に二人しかいないみたいに喋り続けている。迷惑にならないだろうか、なんて考える脳みそはどこに置いてきてしまったのか。嫌でも聞こえてくる話し声に、つい耳が傾いてしまう。プリントを解く手はまだ動きを止めたままだった。

「昨日のさあ、ミニゲームのとき、後藤めっちゃ調子乗ってたよな？」

「ん〜……そうか？」

「アイツ自己中過ぎなんだよ。俺フリーだったのに全然パス出さねえで一人で突っ込んでさ、結局止められるんだよ。無理ならパス出せよ」

「まあ、そうだな。確かに一人で突っ走ってる感があった」

「だろ？ マジでム力つくわ」

「でも結構走ってたよなあ。あれでもっと視野広くなったらいいんだけど」

「いや、無理だろ。あれがアイツの限界だよ」

二人の会話はさつきからずつと似たようなパターンだった。里田が何かしらの不満を言い、北村がそれを軽く肯定したり、やんわりと受け流したりする。今は所属しているサッカー部の話をしているようだが、やはり同じパターンだ。つまらない。里田はずつとグチばっかで、聞いているだけで僕も嫌な気分になるが、北村の受け答えも何だかいやらしく感じる。

里田と一緒にたつてグチればいいのに、会話を丸く収めようとする感じがどうもスッキリしない。「俺はこいつとは違いますよ」とでも言いたいのか、余裕がある雰囲気を出したいのか知らないが、とにかく鼻につく。大体こいつはいつもこうだ。クラスで目立つグループにいるくせに、

一步引いた立ち位置から動こうとしない。それが高評価を受けているらしいが、理解が出来ない。僕からすると女子ウケを狙っているのが見え見えた。叩かれないために、安全圏から出ないまま好き勝手やってるこいつのどこがいいのか……。

「後藤さ、絶対女子意識してるよな。何人か見に来てたし」

「マジ？ あんま覚えてない」

「見てたよ。多分女バスの奴ら。部活終わりつぽかった」

「へー……そうなんだ」

お前こそしっかり意識して見てるじゃないか、と里田に言つてやりたかった。

「あー、彼女欲しいな。やっぱり。彼女欲しい」

何がやっぱりなのか。

「彼女は欲しいよなー、やっぱり。うん」

だから何がやっぱりなんだよ。

「そういえば、上本、また告られたつてよ」

その名前が出た瞬間、咄嗟に反応し、全身に力が入った。右足を机の脚にぶつけてしまい、二人が振り向くほどの音が鳴った。会話は止まり、教室に空調の「フオー……」という音だけが流れる。左手で頬杖をつきながら、右手に持ったペンを、問題を解いているふうに動かす。

素人なりに精一杯演じてみせた「何もなかったですよ」の姿に二人は疑問を抱かなかったよう
で、会話が再開した。僕の意識はもうその会話から離れようとはしなかった。

「えーつと……誰に？」

「四組の堀井。あつけなくフラれたらしいけど。笑うわ」

「上本はなー、ガード固いからな」

里田が僕の心を読んだなんてそんな訳はないが、出来過ぎた偶然に背中が汗をかいていた。上本奈々子。さっき、かき氷の味は何が好きなんだろうとか甘い想像の対象にしていた女子を、今二人が話題にしている。

上本の話が出た途端に体温が二度くらい上がった気がするが、きつと気のせいだ。

「こないださー、上本があそこに居たつて。あの、『ギャリギャリ』」

「ああ、校門の前の、かき氷売ってる車な」

「そう。そこでかき氷食べてたつて。友達と二人で」

「ふーん……。……何だよそれだけかよ」北村がからかうように笑う。

「別にいいだろ。上本で思い出しただけだわ」まただ。里田はすぐ不機嫌になる。

「てか、あの店夏休みでも学校に来るんだな。休みだから生徒来ねえだろ」

「午前中だけ来てるっぽい。部活とか補習終わりの奴とか、少しはいるだろ」

いや、上本がかき氷食べていたなら絶対そっちを広げるべきだろ。なんで移動販売車の方を広げるんだよ。絶対にそっちじゃないだろ。何なんだよこいつらは。

「上本がかき氷食べてたつて誰とだよ？」おつ。いいぞ。もつと聞いてくれ。僕はいつの間にか、懸命に耳をそばだてて聞いていた。

「いや、そこまでは知らねえよ。友達と食べてたって聞いたから、女子の誰かだろ」

「そっか」

北村の相槌は興味なさげだった。お前にとつてどうでもよくても僕にとつては重要問題なんだよ。里田も状況を詳しくは知らないらしく、これ以上話が広がりそうにないと分かると、失意のため息が出た。

会話が止まり、教室内が静かになったタイミングを見計らったように、どこかで救急車のサイレンが鳴った。かなり近くで聞こえ、学校の目の前の道路を通っていると思われた。すると、サイレンに呼応するように犬の遠吠えが聞こえてきた。こちらまかなり近いらしく、教室のすぐ下の方から声がした。

「今の犬だよな？」遠吠えから少し置き、北村がほぼ確信を持った声で里田に聞いた。

「おう。犬だった……めっちゃ近くにいなね？」

「だよな。こっちの方から聞こえたけど」

北村は席を立ち、僕の机の二個前と一個前の机の間を通ってベランダに出た。

「いるわ！ 犬がいる！」

かなり興奮しながら里田の方を振り向いて言った。生まれて初めて犬を見た人みたいなテンションだった。

「マジ！？」

こちらま北村に負けず劣らず興味津々で、走りながらベランダに出た。

学校に犬が入ってきたことの何がそんなに面白いのだろうか。小学生の頃なら確かに興奮したもの、高校生になった今、そんなことではしゃぐ奴らが馬鹿に見えてしょうがない。

「おい、あの犬、迷子になってる犬じゃね？」

「え？ ……マジだ！ あの、ポスターのやつだ！」

一段とテンションが上がった声は、室内にいる僕にも余裕で聞こえてきた。迷い犬なのか？

「だろ！？ しかもあいつ、賞金かけられてるぜ！ 捕まえた人に十万！」

「あー！ 書いてた！ ポスターに書いてた！ ヤバ！ 捕まえに行こうぜ！」

北村の犬捕獲の提案に、里田では言葉ではなく行動で同意を示した。「おう」とも「うん」とも言わず、急いでペランダを飛び出しドアに向かって走り出した。

北村もそれに続き、教室の外へ向かった。急ぐあまり、机に腰をぶつけたが、歪んだ机を直すことはしなかった。

僕は突然走り出した二人に驚き、呆気にとられることしかできなかった。ペランダから出てきた北村を「視線だけで追いかけていたら、不意に僕の方を見て目が合った。北村は止まり、急停止したスニーカーが短く高い音をたてる。

北村は何も言わなかった。ただ僕の方を見て、何を考えているか全く分からない表情をしていた。気まずさに耐えかねて目を逸らそうとしたとき、ようやく北村が口を開いた。

「吉井君も来いよ！」

頭の回転が止まった。ヨシクンモコイヨ？ つまりそれは、僕も一緒に犬を捕まえるのに協

力しろと、そう言っているのか？

「え？ 僕？」

「早く！ 逃げられる！」

北村は、煽るように誘うように、手招きをした。

「おい！ 急げ北村！」

お前まだいたのかよ。里田がドアのところから叫んだ。

「三人の方がいいだろ！」 北村はすぐさま言い返した。

三人の方が捕まえやすい。それは確かに、そうだ。そんなの僕も里田も分かっている。でも、だからといって、簡単に誘えないだろ。僕とお前なんてほとんど話したこともないし、そんな奴らが一緒に行動しても気まずいだけだ。そんなの北村だって分かっているはずだろう。なのになぜ、僕を誘うんだ。なぜ、僕を誘えるんだ。

「行こうぜ、犬捕まえに」

なおも北村は強引に僕を誘った。僕のような消極的な考えは、一切持っていないようだった。驚いた。こんな奴がいるとは。陽キャなんて皆同じで、仲間内だけで盛り上がって、周りのことなんて気にしない奴らだと思っていた。だが、北村は少し違う気がした。「行こうぜ」と言った北村の目は、打算なども感じさせず、ただ「行こうぜ」と言っていた。

誘われたことに初めは困惑していたが、僕はだんだんとその誘いに乗りたくなってきた。狭い教室を抜け、犬を追いかけたくなってきた。

北村の快活さに、簡単に感化された自分自身が少し悔しかった。だがその悔しさは、本心を抑えつけて教室に残る選択をさせるほど強くはなかった。

「うん」声は小さかったが、頷いた首は確かな意思を表した。

「よっしゃ」北村の声も小さかった。まるで僕が誘いに乗ることを最初から分かっていたみたいに。もしかすると僕は、こいつらみたいに好き勝手に行動したかったのかもしれない。僕にはできないと決めつけて、自由に生きる奴らを羨ましいと思う気持ちを嫌悪に変えて――。

いや、今はいい。その気持ちに気付いてしまったら、自分が惨めに思えてきそうだった。心に蓋をして、里田と北村に続き教室を飛び出した。

階段を駆け降り、開放された広い出入口を抜けた。強く照り付ける太陽が眩しく、思わず左手で目の光を遮った。薄目を開けると、指の隙間から陽光が漏れ込み、直視できない輝きが目に強く残った。

三階の教室から一階に降りただけで、もう息が上がり始めていたが、部活生の二人はそんなことないようで、先へ進んでいた。

さっきまでいた教室がある校舎と、反対側の校舎に挟まれた空間の通路に來た。さっき二人はベランダから見下ろして犬を発見していたから、きつとこの辺りで見たのだろう。

「ここにいたよなー？ さっき」

雑草の茂みに駆け寄りながら、北村が尋ねる。同じく犬探しに集中している里田は、ちゃんと聞いていないような無関心な返事をしている。

二人に倣うように、僕も草を掻き分け犬がいなか探したが、「手とか服が汚れる」とか「虫がいたら嫌だ」とか、そういった心配事が邪魔をしてくる。

「いた！」

里田が叫んだ。指をさした方向に、スタンダードな毛色をした柴犬がいた。口を開け、綺麗なピンク色の舌をダラリと垂らしている。四本足で直立し、こちらを見ている。

里田の発見にいち早く北村が反応し、ダッシュを始めた。白い夏服がもどかしそうに見えるほど、両手を大きく振り懸命に走っている。

北村のすぐ後に里田もスタートした。僕も遅れながら二人に続く。二人の足の速さに、「そうか、こいつらサッカー部だったな」と思い出す。見る間に距離は開き、背中が遠ざかっていく。特に里田が速く、遅れて走り始めたにもかかわらず、もう北村の先をいつている。

里田がかなり近づくも、犬は微動だにしない。「いける、このまま里田が捕まえられる」そう思ったとき、突然犬が身を翻した。素早く前足を動かして向きを変え、細い四本の足で力強く駆け出した。あつという間に視界から消え、それを追いかける二人も犬に続き僕からは見えなくなった。やっと二人に追いついたが、犬はいなかった。二人も見失ったようで、草むらへ乱暴に入り、必死に探している。

里田も北村も汗をかいていた。額を拭った前腕に、貼り付けたように汗が光っている。立ち止まって気付いたが、僕も背中に気持ち悪いぐらい汗をかいていた。額に意識を集中させると、汗がじわあど湧いてくるのが分かる。

「おい、お前も探せよ！」

ぼうつと突つ立っていたら里田に怒られた。

「ああ、ごめん」ビビッてしまい、思わず謝った声はちゃんと聞こえたのか分からないくらい小さかった。慌てて草むらの中に入るが、慌て過ぎて、どう考えてもあの大きさの犬が隠れられる訳がない小さな茂みを探してしまった。

「別れて探そう」

声のした方を見ると、北村が髪をかき上げながら僕と里田を見ていた。

「俺と吉井君でそれぞれ別の所に行くから、里田はここを頼む。手分けして探そう」

「おう、分かった」

「じゃ、行こう。吉井君」

僕の賛成を待たずに北村の案は可決らしい。過半数の支持で決定ということなのか。

「ほら」

北村はまた手で僕を誘った。僕は無言で北村に着いて走り出した。

八月の太陽は容赦がなかった。雲一つない青空といえは聞こえはいいが、今の僕にとつては迷惑なだけだった。視線の先のアスファルトに逃げ水が見え、気温の高さを実感させられる。汗は止まることはなく、拭いても拭いても流れてきて、短い袖の先は拭った汗でびっしょり濡れ、腕に纏わりついてきて気持ちが悪かった。いつの間にかYシャツの裾はズボンから顔を出し、生徒

指導の先生がいたらすぐに注意されるだろう着こなしになっていた。

さつきからあの犬を探しまわっているが、一向に見つからなかった。時間の経過と共にやる気は失われていき、その反面疲労は確実に溜まっていった。

三人で犬を追いかけて見失ったときから、もう三十分は経った気がする。それぞれで別れて探すという提案は、効果があつたのだろうか。他の二人は見つけただろうか。ひよつとすると、もう既に捕まえていて僕は今無駄に汗をかいているのかもしれない。

犬が学校から逃げ出している可能性だつてある。そもそも気まぐれにふらつと入ってきたんだから、すぐまた出ていつている方が自然だ。猛スピードで近づいてくる里田から逃げ、そのまま校門を越えていても何もおかしくない。

それに、仮に見つけられたとしても僕の足で捕まえられるだろうか。さつき逃げたときはかなりのスピードだった。結局捕まえられなければ、見つけたとしても無意味になってしまう。

僕は何でもこんなことをしているんだ。いつもなら、涼しい教室でだらだらとプリントを解いているはずなのに。

犬を追いかけるよりも、プリントの問題に頭を悩ませたいとは思わなかったが、今はただこの地獄みたいな暑さから抜け出したかった。「涼しい教室」という言葉が非常に魅力的に感じた。

一滴の汗をかくこともなく、机に肘をつき頬を支えながら、気だるげに右手を動かす。それでよかったんじゃないか？ 足を一歩踏み出すことさえ億劫になる灼熱の空気の中、いるのかも見つかると分らない犬を追いかけるのは想像以上にキツかった。そもそも、こんなことにな

るなんて考えもしないまま外に出ていた。今思うと何であんなやすやすと北村の誘いに乗ったのかが分らない。

ふと時間が気になった。近くの教室の窓から覗き、壁に掛けられた時計を見る。外の景色が反射して見えにくかったが、何とか針の位置を読み取れた。教室を出てからまだ二十分も経っていなかった。教室にいたときの時間はうろ覚えだったが、誤差があつたとしてもせいぜい二、三分ほどだろう。

三十分は経つたと思つていたのに、実際は二十分だった。その事実が、さらに疲労を感じさせ僕に重くのしかかった。

ほんつとうに疲れた。もう止めようか。僕だけ教室に戻ろうか。

二人への裏切りともいえる感情が芽生えた。裏切り、と表現するほど、犬捕獲に真剣になつているとも思えないが。

あ、いた。

犬を見つけた。咄嗟に柱に隠れたからか、あちらはまだ僕に気付いていないようだ。柱の陰からそつと顔を出し、様子を確認する。

遊んでいるのだろうか。キツネ色の体毛に覆われた犬は、草の茂みに体ごと顔を突っ込んでいる。よくあんなことできるな、とつい人間目線で考えてしまう。

ガサ。と音をたてながら草の中を動いており、いつ顔を出すか分からない。音が出るたびに心臓が締まる。何度目かの「ガサ」に耐えられなくなり、また柱の陰に顔を戻した。いつの間にか、

左胸が勢いよく躍っている。

とにかく、僕に気付いていないならチャンスだ。そっと近づいて捕まえてやろう。もう一度犬の方を見た。草の中から出てきていて、顔が見えた。

気付かれるんじゃないかと慌てて隠れようとしたが、明後日の方向を向いており、気付く様子はなかった。だが、犬の周りには僕が隠れられそうなものが無い。一度柱から出るとすぐに気付かれてしまうだろう。

犬はなかなかチャンスをくれない。その辺をうろつくだけで、こっちへ近づいてくることもなく、かといって遠くへ離れていくこともない。だんだんともどかしくなってきた、いつそのこと突撃してやろうかと思った。

じれったい思いをしながら息を殺して観察していると、犬は背中を見せた。柱から出て五歩も踏み出せば触れる距離だった。

いける。今だ。

なるべく静かに近づこうという計画だったが、一歩目からそれは失敗した。踏み出した足音でこちらを振り向き、一目散に駆け出した。

「やらかった」と感じたものの、まだ希望を捨てずに必死に追いかける。しかしその志も虚しく、距離はみるみる開いていく。考えてみればあの二人でさえ追いつけなかったのだから、僕には到底無理だ。

簡単に撒かれ、また一人で無気力に歩く時間に逆戻りだった。夢中になっているときは忘れが

ちだが、集中力が落ちたときに、溜まっている疲労を強く実感する。

そうだ、僕はさつき諦めかけていたんだ。一度見つけて追いかけたし、もう十分だろ。さつきよりはマシだ。こんな似合わないことさせずに、さつさと教室に帰って休ませてくれ。

誰にも言う予定のないグチが次々に出てくる。疲れた頭は、壊れたように「暑い」と「キツイ」の二語をリピートし続ける。

うわ、いた。

ラッキーと言うべきだろうか。二五メートルほど先に犬を発見した。横の方から視界に現れ、のんきに歩いて出てきた。

隠れようとしたが、さつきのような柱は少し離れた距離にしかなかった。焦ってどうしようと犬を見たとき、向こうも僕に気付いた。

ヤバイ、逃げられる。と思ったが、犬は動かなかった。さつきより距離があるからなのか。それとも一度僕からは逃げているためナメているのだろうか。犬は頭が良いというからどちらもあり得そうだが、黒く輝く小さな瞳からは何も読み取れなかった。

とりえずあず柱に隠れようと考えた。犬を刺激しないようにそっと歩き出す。犬は僕を目で追うが、動こうとはしない。

上手く柱に隠れられた。顔だけ出して確認すると、もうこつちを見てはいなかった。それどころか、なんと近寄ってくる。僕が突然消えたとも思ったのか。やはり知能が高いといつても所詮は動物だな、と警戒心のなさを嘲笑する。

柱のすぐ裏側まで来た。僕が隠れている面のちょうど反対側だ。

今なら絶対にいける。そう確信した。

犬までの最短距離を狙い、真四角の柱の辺に沿うようにして飛び出した。

捕まえようと伸ばした腕からすんでのところで逃れ、先ほどと同様に犬が走り出した。だが、距離は比べ物にならないほど近い。ここで絶対に捕まえると気合いを入れ直し、追いかける。犬も疲れてきているのか、さっきよりもスピードを感じない。縮まっているのか離れているのか分からないが、とりあえず明らかに離されてはいない。いけるかも、という思いが背中を押し、僕自身も今日一番速く走れている気がする。

もう一度手を伸ばせば捕まえられるかもしれないが、ここで失敗すると一気に距離を離されそう。北村か里田、どっちか来てくれないか、あいつら何やってるんだ、と、余計なことが頭に浮かぶ。距離はまだ縮まっていはいない。

ダメだ。このままだと僕の方が先にバテる。どうにかしてここで捕まえるしかない。確実ではないが、もういくしかない。

躍動しながら膠着している状況に区切りをつけようと考えがまとまったとき、犬が落ち葉で左の後ろ足を滑らせた。走っていた足が止まり、バランスを崩す。

すかさず前にしゃがみ込み、両手を精一杯伸ばして全力で捕まえようとする。優しく温かい毛並みに触れた。逃げられないよう、痛くない程度に力を加え始める。

強く前に進もうとする力に驚き、一瞬手から力が抜ける。犬はその隙を見逃さなかった。「ミ

スった」と思ったとき、もう僕の手から抜け、走り出していた。四本足のバランスを甘く見ていた。少し崩れただけでは簡単に立て直せるんだな。

一方の僕は大きくしゃがみ込んでいたため、もはやここから倒れずに体を起こす方が無理だった。犬を捕まえられず、からっぽになった右手から地面に着き始め、次いで左手、膝、胴体の順で倒れた。うつぶせではなく横向きに倒れたため、上手く僕から逃げた犬が、振り返ることもなくそのまま遠くへ走り去っていくのが見え、そのうち視界から消えた。

逃がした悔しさですぐには起き上がれなかった。体と接しているアスファルトが熱い。布を隔てていない腕が特に熱く感じ、大チャンスをもノにできなかった僕への罰のように感じた。

起き上がり、ボロボロの状態で歩き出した。一気に疲れが押し寄せてくる。スラックスが汚れていたが、それはたく気力さえ無かった。蟬の鳴き声が、頭の中でこだまする。

僕を試すように、挑発するように、犬はすぐに姿を表した。その目は追いかけることを望んでいるように見え、僕が全力で走っているのに対し、こいつはただ遊んでいるに過ぎないのかもしれないと思った。

どうして僕の前にばっかり来るんだ。お前を本気で捕まえたいと思っているやつが二人もいる。しかも僕より足も速いし体力もある。そいつらと遊んで来いよ。

そんな思いが犬に伝わるはずもなく、ただ僕を見て「ハッハッハッハッ」と息をしている。じつと見つめても逃げることはせず、イラついてきて、追いかけようと思い一歩大きく踏み出したが、二歩目が出なかった。どうせまた逃げられる。無駄に体力を消費するだけだ。僕の中の

僕がそう囁く。

いや、でも。こんなに疲れて、制服も汚れるほど必死に追いかけたんだ。ここまでやったんだし、捕まえない。また逃げられるかもしれないけど、今こうやってチャンスが来ている。目の前にいるんだ。追いかけて続けたら、北村か里田が来て挟み撃ちにできるかもしれない。

こいつを捕まえるために走り出すかどうか、迷っている僕をよそに、変わらず舌を伸ばして呼吸を続けている。僕に諦めの気持ちがあるのを見抜いているのか、距離が近いにもかかわらず逃げようとはしない。初めてこいつを見たときみたいに、直立したまま僕の顔をじつと見ている。まるで僕に追いかけられるのを待っているようだ。人間と遊びたいときの犬は、きつとこんな顔をするんだろ。犬を飼ったことがないから知らないけど。

追うか追わないか、迷ったまま決められない僕に痺れを切らしたのか、ふいと向こうの方へゆつくりと歩き出した。

今すぐに決断するべきだ。体力は限界に近づいていたが、もう一步も走れないほど疲れ切っている訳ではなかった。気持ち次第で走ることもできた。虚ろな目で、少しずつ離れていく犬の後ろ姿を見ていた。踏み出そうと足を少し動かしたとき、太ももが重かった。その重さを引きずって走ることは、できなかった。重さもキツさも全て背負ったまま走り出す気力は、残っていないかった。「ごめん、二人とも」誰に聞かせることもない小さな呟きが自然と口から漏れた。「行こうぜ」と僕を誘った北村は、多少の期待をしていたんじゃないか。「ごめん」というのは、その存在していたかも分からない期待に向けたものなのだろうか。僕にも分からない。しかし、簡単に諦め

られなかったということは、僕はいつの間にか本気で犬を捕まえようとしていたんだな。

唇を噛みしめながら、遠ざかる犬とは逆の方を向いたとき、里田が全速力でこちらに向かってくる。不可解といった顔をしていて、怒っているようにも見えた。それが怒っている顔なのか、全力で走っているとき特有の顔なのかは分からなかった。何か言われるんじゃないかと、身構えて体を固くしたが、そのまま僕を通り過ぎていった。

慌てて里田の方を振り向いた。犬に迫っている。犬は、何かを察知したのか、耳を真つ直ぐに立て、里田の方を向くこともなく突然走り出した。「クソッ！」里田が追いかけたまま叫ぶ。一匹と一人はそのまま鬼ごっこを始め、角を曲がり僕の視界から消えた。

見られていたかもしれない。里田に、犬を追うのを諦めるところを。さっきの、不可解そうな顔を思い出した。睨むように僕を見て、何か言いたげなまま走り去っていった。

犬と里田が走っていった方向をなんとなく眺めた。捕まえられたのだろうか。かなり近づいていたが、犬もなかなかの速度で走っていた。ぼうつと突っ立っているのも嫌になり、近くのベンチに座ろうとした。

「おい！」

突き刺すように響いた。声の主は里田だった。先ほど犬と共に僕の視界から消えた場所から、大股で歩いて戻ってくる。怒りに満ちた表情を浮かべながら。

「お前、何で追いかけてなかったんだよ」

意外と冷静な声だったが、心の奥底にある怒りを感じ、身震いした。

「さつき諦めたよな？ あんなに近くにいたのに」

やはり見られていた。僕は里田の目を真つ直ぐに見れなかった。僕が何も言えないでいると、
「何黙ってんだよ！ 何とか言えよ！」厳しく問い詰められた。里田の声からは怒りしか感じない。
「お前のせいで逃がしたんだぞ！」

さらに一步詰め寄り、圧が強くなる。俯いていた顔を上げ、何とか里田を見たが、すぐ目を逸らしてしまった。潰されるように睨まれ、苦痛を感じた。

何も言い返せなかった。僕のせいで逃がしたというのは正しいのかどうか分からないが、諦めたことに関しては紛れもない事実だった。里田に言われなくても、やってしまったと僕が一番実感している。そこを責められることで、負い目をより一層強く感じる。沈黙を続ければ続けるほど、里田の怒りを煽ることになると分かっていたが、やはり何も言えなかった。

「おい、何してんだよ」

北村が駆け寄ってきた。状況が飲み込めないといった顔をしている。僕に迫る里田を見ておかしいと思ったのか、片手で里田を制し、二人を引き離す。

「こいつが犬追いかけるの諦めてんだよ」

里田が僕を指さす。真つ直ぐに向けられた人差し指に圧迫感を抱く。

「そうなのか？ 吉井君」

質問した北村の表情にも声にも、怪訝さは一切無かった。ただ純粹に本当かどうかを知りたいだけのようだった。こうシンプルに聞かれると、普通に問い詰められるよりも答えにくさを感じ

てしまう。

「……うん」

あまりにも小さくてはつきりせず、「うん」なのか「おん」なのか自分でも分からなかった。

「そっかあ……」

北村の心情が図れない。里田のように怒り出すかと思ったら、不気味なほどに落ち着いている。諦めたことを認めても、それに関して追及をしてこない。それどころか、まるで北村に非があるように、どこか寂しそうな表情をしている。

「ごめんな、無理やり誘っちゃって」

ほんの少し眉を寄せ、目を細めて申し訳なさそうな顔をし、両手を体の前で合わせた。

僕は今謝られたのか？ ……なぜだ？ 悪いのは犬を追いかけるのを諦めた僕の方じゃないのか？

北村の行動が理解できなかった。北村は、「無理やり誘って悪かった」と言った。つまりそれは、僕を誘ったことに対し、申し訳ないと思っているってことだ。てっきり、北村は僕の気持ちも考えず、犬を捕まえることだけを考えて僕を誘ったものだと思っていたが、どうやら違うらしい。

「無理に付き合わせて悪かった」

北村はもう一度謝った。里田は何も言わず、ただ僕と同じく北村を見ている。突然の謝罪に、里田も困惑しているように見える。

ああ、僕は誤解していたんだ、北村のことを。「陽キャ」と一括りにして、他の奴らと同じように、

いけ好かないやつと決め込んで、北村個人を見ようとはしなかった（見たくない、つてのもあつたけど）。なんだ、北村、良い奴じゃないか。

「それは違う」

北村と里田が同時に僕を見た。二人とも驚いた顔をしている。きつと僕が、強い意思を持つて反発したからだ。

「僕が犬を探すために外へ出たのは、自分の意思だ」

そうだ、確かに北村に誘われたのがきつかけだったが、最後に決めたのは誰でもない僕自身だ。それに僕は……あのとき確かに、誘われたことを嬉しく感じていた。その誘ったこと自体を謝られるのは、感じた嬉しさを否定されたように感じた。

「だから、そんな……そんな風に謝るな！」

口調が強くなった。二人はますます驚いた様子だった。僕はどうかやら興奮してきみたいだ。

あのとき諦めたのは完全に僕が悪い。それを責めるんじゃないかと謝るなんて……。余計に悔しさを煽られる。諦めた自分が、心底不甲斐なく感じる。自分自身に対し、やり切れない怒りが湧いてきた。それは北村にぶつけるしかないと思った。理不尽だと分かっている、この情動はもう止められはしなかった。

「そんな気遣いなんていらぬ。僕を見下すな。これだから……これだからお前ら陽キャは！」
言ってやった。北村は驚きを超え、怯んでいた。

感情を抑えずに出しきったら、冷静さが戻ってきた。今発した言葉が急に恥ずかしくなってきた。

る。思わず北村から目を逸らすと、逸らした視界の先に犬がいた。あ、いる。と思ったときには、もう汚れたスニーカーで地面を蹴っていた。

疲れているはずなのに、全力で走るのがやけに気持ちいい。息が切れるのが聞こえる。足を前に踏み出すのも、腕を大きく振るのも、キツいはずなのに、どこか清々しい。走り出した瞬間、さっき諦めたときの罪悪感をそこに置いてきたような感じだ。体が軽く、それ以上に心が軽くなり、僕の両足は大きな躍動を見せた。

犬のスピードも落ちていく気がする。そりやそうだ、これだけ走ってんだから。僕が知っているだけでも、僕と里田と鬼ごっこをして遊んでいる。もしかすると北村に追いかけられていた時間もあつたかもしれない。規則的に動く四本の足に追いつき、止められるかもしれないという希望が湧いてきた。

だが、もちろん僕にも疲労はあつた。軽やかに走ろうとする心に、体がだんだんについてこなくなつた。もつと走りたいが、走れない。足が少しずつ遅れだし、肺が苦しくなってくる。喉の渇きを感じて唾を飲み込むが、水分量が全然足りなかった。粘り付く渇きに顔をしかめる。もう少しで追いつけるのに。距離は離れつつあつた。

右に誰かの影を感じた。北村だった。綺麗なフォームで走り、僕を少しづつ追い越していく。だが僕からも犬からも距離を取り、かなり横の方で走っていた。疑問を感じながら走っていると、左から里田も同じように距離を取って走ってきていた。二人が同じことをしている。何か思惑がありそうだったが、僕には考える余裕がなかった。

二人が僕を追い越し、犬に並んだ。すると、一気に抜かし、距離を詰め二人同時に犬の前に出て止まった。犬は驚いた様子で急停止した。捕まるまいと、僕らより二本多い足を忙しく動かし反対へ向きを変えた。犬が方向転換した先には、両手を広げながら飛びこむ僕がいた。観念したように動きを止め、しかし顔はすごく満足そうに、僕に抱きかかえられるのを待っていた。転ぶように前のめりになって犬を捕まえ、さつき触れた温かい毛並みをもう一度感じる。今度は、しっかりと、放さないように。

「こいつ、どうする？」

一通り喜んで落ち着いた頃、里田が切り出した。

「どうするって、もちろん飼い主に持っていくだろ。そして賞金ゲットだ」

「ゲットだ」の部分で北村が握り拳を作りながら言った。

「でもよ、誰か連絡先とか住所知ってるか？」

北村の、間の抜けた「あ」を最後に、三人とも黙ってしまった。下を向くと、太陽が作り出す影が三人分集まり、知恵を出し合っているようだった。

「あ、交番に連れて行くのは？ 保護してくれるかもしれないし、この犬の『探しています』のポスターもあるかも」

「おつ、それいいな！」二人が賛成してくれた。里田は軽く頷いただけだったが。

学校のすぐ近くにある交番へ向かった。そういえば、僕らは補習を受けている最中だった。も

う大分怒られるようなことをしていると思うけど、校門から出る瞬間は、特別に背徳感を抱いた。何故かそれが妙に僕を高揚させた。

腕の中に収まったままの犬は、ずいぶんと落ち着いていた。たくさん走って疲れたのか、鳴き声一つたてなかった。

学校を出てから少し経って、北村が「代わるよ」と言って犬を受け取った。北村は里田にも持たせようとしたが、「嫌だろ、毛付くの」と断って持とうとしなかった。うん、こいつはやっぱり嫌な奴だ。「君たちはまだ高校生だから、多分だけど、このお金は君たちじゃなくまず親御さんにいくんじゃないかな」

交番に着いて事情を説明した後、やたらと賞金について聞く北村と里田に、若い警官は言いにくそうに告げた。二人はどれだけ必死で犬を追いかけたか力説し、「こいつが最後飛びこんで捕まえたんですよ!」と肩を揺さぶられ、恥ずかしくなった。だが同時に嬉しさも感じた。

結局、「飼い主と連絡がついたら君たちにも連絡する」ということになり、三人それぞれスマホの番号を書いて交番を出た。

「あそこで、かき氷でも食うか?」学校の前の「ギヤリギヤリ」という店名の移動販売車を指さし、北村が提案した。

「いいじゃん、食おうぜ」里田がノリノリで賛成した。もちろん僕も同じ気持ちだった。走り回ったことで死ぬほど汗をかいており、かき氷は一番欲しい食べ物だった。だが。

「吉井く……吉井も食べるだろ?」北村が振り返って僕を見ながら聞いた。

「あつ、えつ、えつと……財布、教室にあるから」突然呼び捨てにされたことでテンパリ、情けない答えがより情けなくなつた。

「しょうがねえなあ、貸してやるよ」当然だ。という風に北村は答えた。

僕たちが教室を飛び出してから、まだ一時間も経っていない。こんな短時間で「君」がとれるほど仲が深まつたとは到底思わないが、悪い気はしなかつた。

「ちゃんと返せよ？」

「賞金が入ったら返すよ」

冗談気味に返すと、「俺らが貰えるか分かんねえだろ」と北村も笑いながら言った。

二人がかき氷を食べるスピードは凄まじかつた。僕が冷たさに酔いしれているとき、味わいも何も気にせずに食べまくっていた。すぐさま食べ終わり、おかわりを買いにいく姿を見て少し呆れてしまった。鮮やかなシロップがかかつた真夏の雪山に一人で夢中になっていたら、近づいてくる足音に気が付かなかつた。

「あれ？ 吉井君じゃん。何してるの？」

思わず目が見開き、咀嚼したまま振り向いていた。そこには、上本奈々子が立っていた。カバンを後ろ手で持ち、笑みを浮かべながら僕を見下ろしている。

突然現れた上本奈々子に驚き、言うべき言葉が見つからない。固まってしまって、口の中でじわわりと氷が解けていく感触だけが広がっていく。

「ちよつと、夏期講習で……」

「へー！ 吉井君もなんだ！ 私も夏期講習だよ」

本当は補習なのに、見栄を張ってしまった。しかも私も同じだというから、後に引けない。どうして僕は、こんな嘘をついてしまったんだろう。

「あ、かき氷じゃん！ いいな、私レモン味が好きなんだよね」

「え、メロン？」

「違う違う、レモンだよ」小さく声をたてて笑った。

僕はメロン味を食べていた。そうか、レモンとメロン、母音が同じだから聞き間違えてしまったんだ。……本当にそれだけなんだろうか。自分と同じように、メロン味が好きであってほしいという願望が少しも無かったのかと問われれば、僕は多分首を縦に振れなかった。

「あつ、レモンね……。ははっ」上手く笑いたかったが、あまりにも不自然だった。

気まずい沈黙が流れた。どうにかしてこの時間を打ち破りたかった。かき氷はまだ十分に残っていた。「食べる？」とスマートに差し出せたら、今日の上本奈々子の記憶に僕は強く残れるだろうか。いや、キモイか。

「それじゃ、私行くね」

「あつ、うん」

「バイバイ」

「バ、バイバイ」

上本奈々子が去った。途端に、大きな息をつく。無意識の内に緊張していたらしい。何でもな

い会話しかなかったけど、宝石のように一つの問題の答えが僕の中に残った。

君は、レモン味のかき氷が好きなんだな。

「おい、上本と何話してたんだよ」

ニヤニヤしながら北村が聞いてきた。

「別に、何も」僕は平静を装いながら答えた。

「何だよ、怪しいな」

北村はまだ聞き足りないといった様子だったが、それ以上追及はしなかった。そろそろ戻るか、となった。

「先生、もう戻ってきてるかもなあ」

「ヤバイ、怒られるかもな」里田が本気のトーンで小学生みたいなことを言う。

「僕は十万貰えるなら少しぐらい怒られてもいいや」

「だから俺らが貰えるか分かんねえだろって。しかも独り占めする気かよ」

また北村が笑った。今度は里田も少しだけ笑っていた。思わずづられて、僕も笑った。

喉が冷たい。かき氷の余韻がまだ残っている。降り注ぐ日光で頭は暑いのに、なんだか変な感じだ。僕はこの「変な感じ」をできるだけ覚えておくことにした。そうしたら、今日のこととも忘れずにいられる気がしたから。

校舎へ向かう僕ら三人を、夏の蒸し暑くて爽やかな風が吹き抜けた。

小説部門

奨励賞

落ちて、た

山田

家に帰ると母親がいる。それはきつと普通のことなんだろう。純は玄関に散らされたパンプスを見て立ち止まった。そのまま何も考えず、パンプスを拾って靴箱にしまう。左右でヒールの高さが違っていた。由紀子は右足に体重をかける癖があるから、そのせいかもしれない。

由紀子は台所で鼻歌を口ずさみながら立っていた。純が帰ってきたことにもまだ気づいていないようだった。

ただいま、と声をかければ、ゆっくりと振り返る。この人はあまり驚かない。昔から妙に肝が据わってるのだ。純が小学二年生の頃、祖母と由紀子の三人で行った遊園地のアトラクション、その時乗ったジェットコースターやお化け屋敷のどれにも由紀子は声を上げることがなかった。かといってつまらなそうに口を噤んでいたのではなく、ずつと楽しそうではあった。すっきり叫び疲れてベンチで休んでいた純は、まるで動じない自分の母親のことを変な人と子どもながら

に思った。これが由紀子を変だと思った最初の出来事だったような気がする。

「なんか作ってんの？」

「パン焼いてた。純くんも食べる？」

由紀子の左手にはパンではなく、酒の入ったグラスが握られていた。ほんのりとバターの焦げの匂いがする。由紀子はフライパンで焼いていたパンを素手でつかみ、ひっくり返して焼き目を観察した。

「ちよつと焦げちゃったかも」

そう言つてまた酒を飲んだ。純は酒を飲む由紀子の姿を見ると、左右の肺の間をすかつと何かが通り過ぎていく気がする。アルコールで上気した頬と重たい奥二重の目とか、暑いのが好きじゃないと家の中ではいつも薄着の格好をしているところとか、そういう細かなことにばかり目がつくようになった。純は返事をせずに、自室にリュックサックを置いて洗面所に向かった。

「友達と喧嘩でもしたの？」

洗面所へ行くには台所を通らなければならない。由紀子は話を無視した純に対し、少しむつとしたように眉を寄せていた。シンクに手をついてこつちを睨んでくる。純は「腹減つてないんだよ」と反射的に答えた。

「東城ん家で昼食食べてきたから」

嘘だった。東城の母親にカレーライスを食べないかと誘われたが、純はすぐに断つた。人の家でご飯を食べることが子どもの頃からなんだか苦手だった。潔癖ではないけれど、見知らぬ皿が

積まれた食器棚を見るとぞわりと肌が粟立つ。多分それが生活の象徴だからなのだと、最近になって思う。この家で人が生きている証だからこそ苦手なのだ。

いつもは仕事で家を空けている東城の母親だが、今日は土曜日だった。黒い髪をきっちりひとつに結び、化粧つきのまるでない四十半ばの人。純は母親という言葉聞いた時、自分の母である由紀子よりも東城の母親のことを思い出す。

「また健人くんところ？」

「テスト近いから、勉強だつて」

「大変ね、高校生つて」

由紀子の呑気な一言を背に、純は洗面所の蛇口をひねった。そのまま勢いよく顔を洗う。外はまだ暑かった。九月も終わるのに夏は全く退く気を見せない。純は顎からぼたぼたと水が伝うのを感じ、目を閉じたまま上の棚からタオルを引っ張った。

目を開けると洗面所の周りにはびしゃびしゃに濡れていた。いつまでたつても顔を洗うことすら上手くならない。

「石崎のお母さん、ほんと若いよね」

学校帰りに寄ったコンビニで、東城は肉まんを買い、当たり前のように純に半分を寄越した。こんな暑い時に肉まんかよ。猫舌の東城はふーふーと息をふきかけている。その間に純は半月型

の肉まんを三口で食べた。

「つて言うのを、この前またコバたちが言つてた」

「ああ、なんだ、お前までそう言うんだってムカつくところだった」

人よりも若い母親というのが誇らしかったのは小学生までの話だ。授業参観に来た由紀子を見て、クラスメイトからお姉ちゃんかと聞かれて純は得意げに首を振った。小学校の狭いあの教室の中で、由紀子が一番若くてきれいで特別な母親だった。当時の純はそんな由紀子を自慢に思つて、世界中の皆にこの人が俺の母親だと言いつらしたい気持ちでさえた。

いつからか、なんて言わない。明確にその思いが変わつたのは中学に上がってからだった。学校という場所は平均値から外れたものを嫌うところで、それは生徒の親も対象だった。異様に若い由紀子を見て、純のクラスメイトは目をまるくしたあとに苦く笑う。その笑顔で異常と特別は違うのだと思ひ知った。女子はひそひそと顔を寄せあつて何事かを話し合い、男子は下心を隠そうとしない意地汚い目で由紀子を眺めた。この日以来、純は二度と由紀子を授業参観に誘わなかった。もう来ないでほしいと正直に話せば、由紀子は一瞬悲しそうにしたあとで、思春期だからかとすぐに納得した。

東城は、純が母親の話をされることを嫌っていると知っているので、進んで由紀子の名を口にしない。由紀子は家の近くのスーパーでパートをしている。たまたまその場面を小林たちが見ただけだ。小林は、

「あれ純のかあちゃんだろ？ めっちゃ美人じゃん」

と早口でまくし立てたあと、

「帰ったら毎日あれがいるんだろ。いいなあ、俺のと交換してほしいぜ」

と言って純を不機嫌にさせた。少々デリカシーに欠ける小林は純の曲がったへそに気づかず、胸もでかかったしなんか色気あるし、とじゃぶじゃぶ火に油を注いでいった。見かねた東城が止めに入らなければ、危うく純は小林の坊主頭に殴りかかっていただろう。

かつて由紀子は純にとつてきらきらと輝く美しい宝石のようで、たくさんの人に見せびらかしたいものだったが、今はまるで違う。誰の目にも届かないよう、家の中に閉じ込めておきたい。小林みたいなやつに見つからないようにしたい。その方向は違えど、宝物という点においては変わらない。由紀子の素晴らしさを知ってもらいたかった昔よりも、自分だけが分かっていたればそれでいいと思える今の方がむしろ大事にしている気がする。

父親がいない分、俺があの人を守らないといけない。ちまちまと肉まんを齧る東城を横目で見て、純はふつと鼻で笑った。東城の母親とは何度か顔を合わせたことがあるし、世間話程度なら東城抜きでもできる。ただ父親は違う。東城の父親が、純は少し苦手だった。不器用なだけで根はいい人なんだけどね、と言う東城のフォローも全く効かない。部外者の俺からじゃ根っこなんて見えないから、あの仏頂面で険しい眉間のしわでしか判断できないよ。純がそう言えば、東城は困った顔をする。その情けない眉の下がり具合が好きだった。

純よりも五センチ背の高い東城と、人よりも足が少しだけ長い純の歩幅はほとんど同じだ。気を遣わないでいいってなんて楽なんだろう、と純は中学の頃に付き合った彼女との帰り道の記憶

を掘り起こして比べた。東城は普段、兄が使っていた自転車で通学しているが、最近ガタがきて修理に出しているらしい。東城の兄は東京の大学に行つて、姉は結婚して家を出た。東城家の子どもは健人ひとりになった。

ずっと何かが純の腕を掠めた。東城の腕だった。純より寒がりな東城はもう長袖に衣替えしている。しかし気まぐれな天気には振り回されているのか、袖を肘の辺りまでくると折り曲げている。ふわりとくすぐったい感触は東城の腕毛だろう。肌の白い東城は毛も薄い。でも触れればそこに毛が生えている。一度も剃ったことがないであろう、柔らかい産毛だ。

「最近は何の子も脱毛するっていうじゃない」

由紀子は純の腕に電動シェーバーを当てながら言った。由紀子は自分の毛の処理をするついでに、たまに純を呼ぶ。純はされるがまま、腕やら足やらを差し出す。剃ったあとの毛は固く太く、濃くなるのだとそこで初めて知った。

「今日、俺ん家誰もいないからさ。父さんも母さんも仕事遅くなるって」

東城が言う。純は僅かに目を上げて東城の顔を見た。目尻がほんのりと赤くなっている。周りに誰もいないことを確認して、東城は純の手首を握った。純はごくりと唾を飲んだ。

そういうこと、をする時の東城は狼の赤ちゃんみたいだ。純は、優しく髪を梳いて耳たぶに舌を這わせてくる東城の背中に爪を立てないよう必死に耐えながら、彼のくるんとはねた髪の手を

見つめた。汗をかくと東城の髪はうねる。部屋に入って早々、東城はエアコンのリモコンに手を伸ばした。寒さに弱い東城の行動として相応しくない。でもそういうこと、をする前なら別だ。

純は狼の赤ちゃんを見たこともなければ、それがどういう形をしているのか正確にわかるわけでもない。けど似てると思う。まだ牙が生え揃っていないし狩りも知らない狼の赤ちゃんに、俺はこれから食われようとしているのだ。二十五メートルプールを休まずに四周泳いだ時のような激しい動悸と興奮が胸をよぎる。

「石崎」

東城の声は他の同級生と比べて低い。時々喧騒に紛れて聞こえなくなる時もあるが、耳に心地いい優しさをもっている。

二人してベッドに倒れ込んだ。親の帰りが遅い日は、毎回のようになつていく。ただ勉強をするだけの日もあった。だけど最近、たがが外れたみたいに互いを求め合っている。

東城とは中学からの付き合いだが、こんな関係になつたのは高校生になつてからだ。純は自分が同性愛者だという確信はない。女子とも付き合い合ったことがある（といってもキスどころか、手を繋ぐことすらなかったが。中学生らしいままごとのようなお付き合いだった）からだ。それに東城以外の男に欲情したこともない。今だって、どうして自分よりもでかくて逞しい男に興奮しているのか分らない。

してもいいか、と問いかけてくるくせに東城は答えを待たなかった。純は少し怒つたように声を荒らげ、乱雑に髪の毛をかきあげた。頭になった額に東城はキスをした。そのまま東城の大き

な手がシャツのボタンを外していく。恥ずかしいから自分で脱ぎたいのに、東城は俺がやると言うて聞かなかつた。

「何考えてんの」

肌着をまくしあげ、東城は純の浮き出た脇腹に顔を寄せた。そこで話されるとむず痒くて仕方ない。純は身を振り、くつくつと笑いが零れる口元を抑えた。

「昼休みの東城のこと考えてた」

「俺？」

「お前さ、まじでバスケットだよな」

いきなりのことに東城は目をまるくして、ばかりと音が聞こえてきそうなほどゆっくり瞬きした。この男は全てが遅い。ご飯を食べるのも体育着に着替えるのも、絶頂に達するのさえ遅い。

今日は昼食を終えると、純と東城は数人のクラスメイトと共に体育館でバスケットを楽しんだ。その中には小林もいた。

東城を見ると、必ずしも体格の良さと運動神経は結びつかないのだと思い知らされる。身長が一八〇近い東城はよく助っ人を頼まれるが、その声掛けに二度目があつたことはない。なんというか鈍臭いのだ。大きな身体をどう扱えばいいかわからず、ただ持て余している。宝の持ち腐れだ。俺だつたらもっと上手く使えるのに、と純は少し悔しく感じる。

東城はコート内をぐるぐる駆け回っているだけだつたが、運悪くボールが彼の元にやってきた。とりあえずドリブルしてみたはいいものの、それからどうすればいいのかわからない。東城の白

い顔が一層青白くなった。まるで宇宙にひとり放り出されたみたいな焦りと絶望に染まっついて、大袈裟だなどと純は苦笑した。球技は下手くそなのに、迷子の顔だけは一丁前に上手だ。

「東城お！」

純はその場で小さく飛び、パス！ と叫んだ。東城の目がのろのろとこつちを向く。ほっとしたように表情が和らぐ。東城が宇宙の藻屑にならないよう、しょうがないから命綱を渡してやる。東城は純の投げた綱に引かれるまま歩き出した。

「ちよつと健ちゃん、まあトラベリングしてる。もう何回目だよ」

ボール持ったまま歩いちゃだめだって、と小林が肩を下げた。純は腹を抱えて大笑いした。健ちゃんの天然がまた出たよ、と笑いは次々にコートにいる人間に伝染していく。ミスを指摘された東城はしまったという顔で曖昧に笑った。ほどなくしてチャイムが鳴り、急いで純たちは体育館を後にした。

「あんなんじゃ一生体育で五取れないぜ」

「他で補うからいいんだよ」

いじられて不貞腐れた東城が純の尻をわざといやらしく撫でた。緩みかけていた空気がパリッと切り替わる。これ以上余計な口を叩かせないためにか、東城は純の唇にキスをして黙らせた。厚い男の舌が入ってくる。上顎を軽く舐められると腰がぐつと重くなった。薄く目を開ける。東城のつり上がった眉の間にしわが寄っていた。不意に東城の父親を思い出し、萎えそうになったので必死に頭から追い払った。こんなところを見られたら殴られるかもしれない。息子に何して

るんだと怒られるだろう。優しく接してくれるおばさんも止めてくれるか分からない。父親と同じになって純を蔑む可能性もある。素直に怖いと思った。東城の広い背中に縋り付くように腕を回した。東城も純の身体を同じ力で抱き返した。ほっとした。あの時の東城もこんな気持ちだったのかもしれない。俺たちは互いが互いの命綱なのだ。

十七年前、母さんも同じだったのだろうか。自分を見失うくらい人を好きになったりしたんだろうか。今の純と同じ歳に由紀子は母親になった。純は想像してみた。自分が子どもをもつところを。でもそれは上手く形にならなかった。

由紀子は十七歳という若さで純を産んだ。ひとりで産んだ。だから純は自分の父親がどういう人間なのかを知らない。

「ばあちゃん、あのさ、母さんと付き合ってた人ってどんな人だったの」

祖母のお土産はいつもスナック菓子三袋だ。コンビニやそこらで買えるものばかりである。どうせ遠くから来るのなら、それっぽい地元の名産品とか持ってきてくれてもいいのに。コンソメ味のポテトチップスを平らげた後、純は指を舐めて服の裾で拭いた。

純はギリギリまで、「俺の父親」と言うべきか迷った。でも顔も何も知らないのにそう呼ぶのはなんだかおかしくて、それに恥ずかしかった。だから「母さんと付き合ってた人」と回りくどい言い方をしてしまった。

テレビの音量をいじっていた祖母が振り返る。純はソファで横たわっていた身体を起こし、床に投げていたクッションを肘置きにして返答を待った。

純の家族の中には男がいない。父親はもちろん、祖父も純が小さい頃に死んでしまっている。幼稚園に上がる時にはもういなかったと思う。

「あなたのお母さん、色んな人と付き合ってたから、どの人か分からんね」

予想になかった返しだったが、言われると、確かにそうかも知ないと納得してしまう説得力があった。祖母はよく、由紀子のことを「与えたがり」と称した。求められれば何でもあげてしまう癖が、昔からあったという。去る者は追わず来る者は拒まず。結果、由紀子のもとに残ったのは、未婚のシングルマザーという肩書きだった。「与えたがり」には、祖母らしい嫌味と同情が込められていると純は思う。

由紀子が自分と同じ歳で、クラスメイトのひとりだったらと考えると、きつと苦手なタイプの女子だったろうなと純は苦い気持ちになった。由紀子の気だるげな喋り方と軽薄に見える笑顔のせいかもしれない。実際は普通の女なのに。話してみなけりゃそんなこと分からないし、純は同年の由紀子とは絶対に関わりを持たうとしないから、誤解は解けないままだろう。

祖母は熱いレモンティを躊躇なく飲んだ。純の肝がひやっと震えた。それを見て祖母は満足そうに笑う。危ないことすんなよ、と言えば、こんなので火傷なんかないわとすげなく返される。「真面目そうな子だったかな」

唐突に祖母が言う。純はスマートフォンに伸ばしていた手を止めてはあ、と聞き返した。

「純のお父さん」

もう結構昔のことだから、あんまり覚えてないね。祖母はまたレモンティを綴る。まだ湯気が立ち上っている、味も上手く分らないだろう紅茶を楽しそうに飲んだ。

「真面目なやつが、普通、十七の子どもをさあ」

「だから真面目そうだった、って言ってるでしょ。見た目じゃ分かんないことばっかよ」

由紀子は意外にもちゃんと料理をするし、純の弁当に冷凍食品はひとつも入っていない。毎日朝早くに起きて弁当を作り、成長期だからしつかり食べなきゃとパートから帰っても休まずに台所に立っている。二人家族にしては少し量が多い食卓。純はそれがほんの少しプレッシャーだった。十七歳のまだ子どもだった由紀子を母親にさせた男は、絶対にろくでもない不良崩れのクズだと思っていた。でも祖母の話では、見た目だけはちゃんとした、真面目そうな男だったという。見た目じゃ分かんない。みんなそうなのだ。由紀子は料理上手だが掃除が少し苦手なもの、祖母がわざと由紀子のいない時間にうちへやってくるのも、俺が東城とキスをして身体を触り合う仲だということも。

ふと祖母は純の顔をまじまじと見つめ、口の端をはつとつり上げた。

「眼鏡かけたら似てるかもねえ、純」

純は露骨に顔を顰めた。自分でも頷くほど母親似であると思っていたし、その何倍も周りから「お母さんにそっくり」と言われてきた。でもこの顔には、確かに父親の破片が埋まっているのだ。目と口は由紀子からもらった。だけど鼻だけは違う。由紀子のまるく広がった小鼻は純には

なく、男性的で大きい上がり鼻は由紀子にない。

純は無意識に鼻を触った。

「一生眼鏡かけない、俺」

「じゃああんまりスマホばっか見てたらだめよ」

祖母は呑気に呟く。ソファの上で寝返りを打ち、左腕を枕にしながら純は、鼻を低くする整形とかあんのかな、と考えた。

「石崎ってすごいきれいな鼻だよ」

祖母が家へやってきた日から数日後、なんとも間の悪いタイミングで東城は言った。褒めたはずなのに、純の顔がじつと冷えていくのをどうしてなんだろうと東城は不思議に呆けていた。

「ほら、俺はこう、のっぺりしてるじゃん。全体的に。だから石崎みたいな顔がちよっと羨ましい」

鼻が高くてだからなんだっていうんだ。純はシャーペンを放り出して、傍らに寄せてあった麦茶を何も言わず飲み始めた。東城の母が持つてきてくれたグラスには、大きな四角い氷が三つ入っている。氷は縦に積み重なっていたが、純がグラスを持ち上げた拍子にカランと涼し気な音を立てて崩れた。

東城は純のご機嫌取りを懸命に励んだが、一度曲がったへそがそう簡単には直らないと知ると目を細めて苦笑する。開いた窓からぬるい風が入り、二人の髪の毛を柔く揉んで通っていく。東

城の家の窓は全て広い。窓の下にはベッドが置かれており、夜は月が眩しくてカーテンを閉めないと眠れないのだとよく愚痴っていた。

東城は部屋に入るとリモコンではなく、真つ先に窓を開けにいった。純も座布団の上に腰を下ろし、ガラス張りのローテーブルの上にノートを広げた。帰り道、今日は母さんがいるんだ、と東城はもう袖をまくっていない、長袖に包まれた腕をさすって言った。そっか、と純は平坦な声を出して、自分でもそれが驚くくらい無感情に響いていたことに戸惑った。だって家に母親がいるのは普通だろう。家と母はセットだ、切つても切り離せない関係にある。しかし東城は何か言いたげに口を動かし、そしてやめた。東城が自分に何を言いたくて、そしてなぜ我慢したのかを純は分かっていたので問い詰めなかった。

車庫には東城がいつも使っている、兄からのお下がりである自転車があった。修理を終えて帰ってきたのだろう。純は、東城の後ろに乗って道を走るのが実は好きだった。二人乗りを注意されると面倒くさいので、自分たちの他に誰もいないところでしかやらないが、それがまた心をくすぐって楽しかった。俺らしいかないからと、スマートフォンから垂れ流した音楽に合わせて歌ったり叫んだり、運動下手な東城の拙いハンドル捌きで転けそうになりながらとにかくタイヤを回して走る。二人だから重いんだよと弱音を吐く東城に変わって純が漕ぐこともあった。でも東城の背中から見る景色の方が純は好きだと思った。疲れないというのが一番の理由ではあるが。

「普通にしても鼻の穴がよく見えるから、鼻毛出てたらずぐばれるぜ」

拗ねたように吐き捨てる純に、東城は数学の教科書から顔を上げて首を捻った。その目にはい

きなり何を言っているんだとハテナマークが浮かんでいる。この東城を見ると、年の離れた兄と姉に甘やかされて育った末っ子なんだということが痛いほどよくわかる。無邪気に「なぜ」を口にすることができるとは実はそう多くない。答えが貰えると絶対的な確信があるから、東城はそんな目で見ることもできるのだ。純は自分の父親のことすら話に出すのがこわくてたまらないのに。時々この男のことが死ぬほど羨ましく思う。俺にも父親がいたら。由紀子を愛してくれるもう一人の男が家にいたら。

純は頬杖をついた顎をしゃくり、左手で自分の鼻をぴんとつついた。鼻先が尖り、また上を向いている。真正面からでも鼻の穴が目立つ形をしているのだ。鼻筋はしっかり通っているが太く、小鼻もそれほど小さくない。見れば見るほど由紀子と違う。祖母に指摘されてから、鏡を見る度に自分の鼻がどんどん歪に見える。

純の発言の意図がわかった東城は、突然腹を抱えて笑いだした。教科書がテーブルから床に落ちる。青の蛍光ペンが所々に引かれた東城の教科書。

東城はまるい目を線のように細くして、向かいに座る純の顔に手を伸ばした。指で純の鼻をつまみ、いや、とまだ笑いの残った震える声で言う。

「急に变なこと言うから、びっくりした。てか石崎、鼻毛とかそういうの気にすんだね」

「のっぺり鼻のお前にはわかんないかな」

「うん、わかんないや。考えたこともない」

東城の指は鼻を降り、人中をなぞって唇にたどり着く。純は自分の唇は好きだった。由紀子と

よく似ている。その膨れた下唇をなぞるように東城は指を滑らせる。純の中にあつた熱い苛立ちが別の熱へと変形していく。東城に身体を触られると、いつもマグマの映像が脳裏をよぎる。腹の奥底に溜まっている怒りや不満という、常に燃えたぎっている熱の波が、ぶくぶくと泡を立てながら流れていく。そしていつの間にかそれらは性欲に変化してしまっている。

一階には東城の母親がいる。グラスから氷がはみ出るくらいに詰め込んだ麦茶をいれてくれた、管理栄養士で時間には少し厳しく、黒ゴムで髪を一本に束ねた、東城健人を産んだ人。

純は無言で東城の指をはらい、膨らみ始めた欲から目を逸らそうとしたが、正面にいる東城のふたつの瞳からはどう足掻いても逃れられる気がしなかった。東城の目尻が赤い。こいつは頭に血が上るとすぐ赤くなる。分かりやすく可哀想だと思った。

「東城」

純の声に東城は何も返事をしなかった。この部屋には自分たち二人しかないはずなのに、もつとずっと二人になりたいと思った。

「母さん、階段のぼる音がでかいし。それに最後までやるつもりはないから。だから大丈夫」

東城は言う。許しを乞う声だった。それがなんだよ。純は鼻で笑いそうになった。あの上品な東城の母親の、階段をのぼる足音を想像して小さく笑った。

最後まで。東城はそう言った。俺たちの最後までどこなんだろう。由紀子は最後までいつてしまったからあなつたのか。

立ち上がった東城は無言で窓を閉めにいった。リモコンを操作し、ピッとエアコンの動く音が

する。純は放り出された数学の教科書から目が離せなかった。青の蛍光ペンで引かれているところは、きつと東城が大事だと、授業をばか真面目に受けているあいつが思ったところだ。そういったことを話したことはないが、おそらく東城も兄と同じように都会の大学に行くのだろう。その時、俺は。まだ由紀子と一緒にあの狭い部屋にいるのだろうか。

東城は教科書には目もくれず、純の腕を引っ張った。お前が取るべきは俺じゃなくてあっちだろう、と、口の端から零れてしまいそうな本音を純は必死で噛み砕いた。

帰った家が真つ暗だと、どうしようもなく不安になる。純は靴を雑に脱ぎ捨て、壁に手をついて電灯のスイッチを探した。

ほんのりと黄味がかった室内灯の光にほっとする。玄関には由紀子の靴があった。今日は遅番だと言っていたはずなのに。

不思議に思いながら居間に行けば、半裸の由紀子がソファで潰れていた。上はブラジャーだけ、下は部屋着のハーフパンツ。しかし長い間履いているせいで、腰周りがだらんと伸びてしまっている。

純は咄嗟に鼻をつまんだ。頭にくる酒臭さだった。由紀子は決してアルコール中毒などではない。ただの酒好きである。毎日ビール一缶は開けないと眠れないというだけで。

しかしたまに、ごく稀に「やり過ぎ」てしまう時がある。それが今日だった。純は手を洗うの

も靴を部屋に置くのも後回しにして、まだほんの少し底に液体が残っている缶たちを集めた。もつたいたいという考えはない。それらを全て台所で流し、潰してゴミ箱に捨てた。ひとつ入れる度にカシャカシャと不快な金属音がする。それでも由紀子は起きてこなかった。

壁掛け時計を見上げるともう午後九時を回る頃だった。東城の母親からの誘いを断り、コンビニで夕食を買って家に帰った。由紀子がいるなんて知らなかった。知っていたらもう少し早く帰ったかもしれない。

純は薄い生地ブランケットを片手に、由紀子が眠るソファの傍らに膝をついた。びつしりと色濃く生えたまつ毛が微かに動く。色素沈着のひどい由紀子の瞼は、化粧をしていない状態でも薄らと赤みを帯びている。

「お母さん」

むき出しの由紀子の肩に触れるのに躊躇したのは一瞬だった。柔らかい肉の感触は温かかった。東城とは全然違う。純の中で知っている他人の肌は東城しかいなかった。

女って結構ぶよぶよしてるんだな。骨なんか存在していないみたいに、どこまでも深く沈んでいきそうなほど肉感が強い。

由紀子の四肢はやせ細っているのに、腹はつまめる程度に脂肪がのっている。服を着ている時是不詳に見えるが、裸になればこの人も普通の、どこにでもいる三十代の中年女性だった。

冷蔵庫には由紀子を作ったであろう野菜炒めが入っていた。きつと夕食を作ってから仕事にかけるだろうという純の予想は当たっていた。純は野菜炒めには手をつけずに、コンビニの袋か

ら肉まんを取り出した。眠る由紀子を見つめて肉まんにかじりついた。

出来たてらしい肉まんは熱く、白い湯気が立ち上る。肉汁が溢れ出し、純は慌ててまた一口食べた。半分ほど食べ終わったところで、おもむろに由紀子の口元へ肉まんを当てた。寝ているのだから当然、口が開かれることはない。そのまま押し当てていたら、肉汁がつうつと零れ、由紀子の唇を濡らした。

不快そうに眉をぎゅつと寄せ、由紀子は唸った。ブラジャーをしただけの胸が小さく、上下に揺れる。由紀子の剃り忘れた顔の産毛がなんだか光って見えた。

純は食べかけの肉まんを袋に戻し、また由紀子の観察に戻った。先ほどまでと違い、由紀子の唇はテカテカと艶めいている。純は自分が東城にされた時を思い出しながら、由紀子の唇の縁を人差し指でなぞった。指の腹に肉汁がつき、ベトベトと嫌な感触を残す。

ずっと気になっていた。女らしい柔らかさのある奥二重の目や、まるく赤い頬。口紅がよく映える厚い唇も、なだらかに膨れた乳房も。由紀子の女性的な部分にばかり目がいくようになった。試してみたかった。

顔にかかっている髪の毛を優しく振り払っていくと、何本かは谷間に滑り落ちていることに気づいた。肩に触れるか迷ったのは一瞬だったが、胸は迷いすら生じなかった。もうここまでやってしまっているという開き直りもあった。

ここで由紀子が始きたら。そう考えるとぞっとした。しかし手は止まらなかった。髪の毛をつまみあげ、そしてゆつくりと手のひらで由紀子の右胸を覆った。ブラジャーの硬い感触しかなかった。

た。その硬さが純の頭をさらに熱くさせた。この殻の奥にあるものを思うと、目に薄く水の膜が張ったように全てがぼやけて見えた。視界が霞むほど全身の血が沸騰していた。

止まらなきゃ。今すぐ止めないといけない。そう思うのに身体は真逆の行動ばかりを起こす。東城の身体を思い出す。筋肉のほどよくついた引き締まった腹と、身長に合わせて伸びた長い手足。狼のような鋭い眼差しと唾液の絡まった分厚い舌。横たわる由紀子とはまるで違うあの肉体を。東城みたいになりたかった。東城が羨ましかった。あんな家に帰りたいかった。父と母がいる、庭つきの一軒家。それに比べてこのアパートは狭い。でも一人で暮らすには寒すぎる。

純は由紀子に背を向け、隠れるように膝を抱えた。恐ろしいと思った。このままだと取り返しのつかないことを、俺はしてしまうんじゃないか。由紀子と一緒にいるとだめになる。そう思うのに、結局自分是由紀子を置いていけない。裸の由紀子に布団を被せられるのは、もう自分しか残っていないからだ。

お母さん、と純は口の中で呟いた。自分に言い聞かせるように。

台所に立つ由紀子の姿は正しく母親そのものだ。授業参観のお知らせを見せると、忘れないうちにと冷蔵庫にマグネットで貼り付け、毎日眺めていたあの顔だった。少し変わったところはあるものの、由紀子はちゃんと母だった。十七という子どものうちに、母になってしまった。

純は小さく息を吐き、由紀子の身体を隠すようにブランケットを被せる。それで由紀子はどうとう目覚めた。

「あ、純くん」

由紀子はまだ眠気を残したあどけない顔で純を見て、そつと上体を起こすと純の肩にしなだれるように頭を乗せた。

「お仕事休んじやった。学校終わっても帰ってこないんだもん、純くん」

「ごめん、東城ん家行つてた。電話したらよかったね」

「いいよ、もう。帰ってきてくれたから」

それでいいわ、と声を落として言う。由紀子は今年三十四になるが、この人の中には今でも十七歳の少女がいる。もしも由紀子が過去に戻れたら、きちんと避妊をするのだろうか。純は聞けなかった。

「どこに行つてもいいけどね、必ずお家帰ってきてね」

控えめに由紀子は言い、純の肩から離れた。強制的な言い方ではなかったが、その分切実さに満ち溢れていた。由紀子はうんと背伸びをして、そして何かに気づいたように口元を触った。

「やだ、なんかベタベタしてる。もしかしてわたし、よだれ垂らして寝ちゃってた？」

恥ずかしそうに手の甲で口を拭う由紀子に、純は首を振った。握りしめた拳を膝に置く。肌が白く、血管が浮き出るほど強く握っていた。手のひらには爪が食いこんでいる。自分の身体にバツが刻まれたみたいだった。

週が明けた月曜日、東城は自転車に乗って登校してきた。すっかり秋めいてきた風の冷たさに、

純も長袖を着るようになった。

自転車を押して歩いていた東城は、突然サドルに跨って純を振り返った。目を見るだけで言いたいことは全て伝わった。純は勢いよく東城の背中めがけ走り、荷台に飛び乗った。衝撃で自転車は揺れ、東城は間拔けな声を上げる。

こうやって帰るのは久しぶりだった。だらだらととりとめの話しながら歩くのもいいが、風に吹かれて道を走るのもやつぱりよかった。少し声を張り上げないと会話ができないのは厄介ではあるが。

純は東城の腹に手を回した。太くも細くもない、中肉中背の腹だ。つまむ肉はない。由紀子に触ったあの夜を思い出し、純は吹き出して笑った。

右に左にふらふらと揺れながらもしつかりと前に進む。あと十分、いや五分で東城は根をあげるだろう。純は束の間の自由を楽しむことにした。空は曇り、頬を撫でる風は心地いい。純は晴天よりもこういう、灰色がかった雲で埋められた、雨になる一歩手前の空が好きだった。

石崎、と東城は低い声を大きくして純を呼んだ。純も口を横に開き、なんだよと叫んだ。

「大学、行かないの？」

なんとなくそういう話をされるだろう予感があった。純は東城の背中に耳をつけ、この肌の下に流れる血の音を聞いた。

「石崎の成績なら、国公立目指せるじゃん。奨学金だって今は色々あるし」

「まだ考えてないな」

自転車が止まる。信号に引つかかったようだった。東城は何か言いたそうに振り返る。

「まだ考えたくないな」

しかし東城が言うより先に純がもう一度答えた。東城は結局唇を一度舐めただけで、それ以上追及してくることはなかった。

こいつの腹の中には今までに我慢してきた言葉がたくさん詰まっているのだろう。純は東城の腹に回した腕をほんの少し強く締めた。

「俺は、石崎がしたいようにしたらいいと思う。家のことか、考えなきゃいけないことって多いと思うけど、石崎の気持ちも大事にした方がさ」

淡々と東城は言う。本当にこの男は優しいな。純は東城のよく動く口を見つめた。優しくて大きい。そして温かい。

気づけばほとんど無意識に口走っていた。

「東城、お前、いいお父さんになりそう」

こいつが父親だったら幸せだろうな。それは純の本心だった。東城のような父が家にいたら。由紀子の傍にいたら。俺を愛してくれたら。

信号が青に変わっても東城は動かなかった。純は不思議に思い、東城を見上げた。その顔は恐ろしいほどに凍っていた。目を見開き、口も小さく開いている。純は東城の背中から耳を離れた。東城の身体はしんと静かで穏やかだった。

「それ、正気で言ってるのかよ」

東城の声はまっすぐだった。黒い瞳は純を射抜くような力で満ちていた。純は自分の胸に大きな穴が生まれ、すうっと何かが通っていくのを感じた。それは寂しさによく似ていた。

正気。正気なのかな、俺は。東城と抱き合ったあとで、眠る母親の身体に手を伸ばした。

東城はどうだろう。こいつだって正気だと言えるのか。温もりを絵に描いたような、お手本のような家で生まれ育ったくせに、女ではなく男を愛する男。

ペダルから足を離し、上体を捻って東城は純を見つめていた。目尻の赤みはきつと怒りだ。この男は全てが本物なのだ。隠せるほど器用じゃない。東城の拙さに純は好感を抱いていた。

純はそれでようやく、やっと自分の失言に気づいた。焦っても遅かった。餌を待つ金魚のように口をばくばくと開閉させるが、肝心の言葉は何一つ出てこない。何を言えばいい。何ができる。何もできないだろう。待っても何も事態は変わらない。純はひりつく喉を無理やり動かした。へへ、と口の端から乾いた笑いが零れた。

「あ、俺、おかしいかも、 shouldn't...」

空いた穴からあの夜を見透かされているみたいだった。動かない由紀子の肌に指を滑らす、浅ましい自分の姿を東城に見られている。あの場に東城がいたら止めてくれただろうか。

東城は前を向き、ペダルに足をかけた。信号は再び赤に変わっている。しかし東城はハンドルを握り、少しの迷いもせずに自転車漕いでいた。

「東城、赤だつて！ おい、危ないからっ！」

純の制止する声はまるで遮断されたみたいに届かない。突如現れた信号無視の自転車に、シル

バーの軽自動車に乗った運転手は驚いていた。ブブーとクラクションが響く。怒声が二人の背中に突き刺さった。それでも東城は走るのを止めなかった。

「石崎」

東城のうなじには汗が点々と浮かんでいる。純が抱きついた彼の背中もじつとりと湿って、少し酸っぱい匂いがした。坂道にかかり、東城は両足をぶらんと放り投げた。重力に従って落ちるように滑っていく。純は慣れない浮遊感にお腹が痛くなった。

「そうだよ。おかしいんだよ、俺ら。本当はもう、ずっと前からおかしかったんだ」

東城は言う。でも純の耳には半分しか聞こえなかった。坂を落ちている間、ダックスフンドの散歩をしている女とすれ違った。女はスマートフォンを耳にあて、電話をしている最中であつたためか、ちらと横目で二人を見るだけだったが、犬は牙をむき出しにしてキャンキャンと吠えた。「だってさ、俺、あんないい親がいて、優しい兄ちゃんと姉ちゃんまでいるのに、ゲイなんだもん。女子じゃなくて男子が好きなんだ。皆と同じ、普通の家に生まれたはずなのに」

どうしてこうなんだろう、俺って。東城は言う。純は東城のシャツをぎゅっと引つ掴んだ。

「前見ろよ、なあ、東城聞いてんのかよ」

「でもよくない？ もう。おかしくても」

東城は純の手に自分の手を重ねた。初めてだった。人前でこんなに近づくのも、二人乗りのまま坂を駆け下るのも。純の心臓は外に飛び出そうなくらい激しく動いている。対して東城は冷静そうに見えたが、真っ赤になった頬と止まらない汗から、こいつもそこまで落ち着いているわけ

じゃないと純は思った。

「正気に戻るの、もうちよつと待つてよ」

修理を終えた東城の自転車は、ちゃんとブレーキも効くはずだ。でも東城はブレーキから手を離して、純を選んだ。もうすぐで坂が終わる。止まらないと。

段々と加速していく自転車から見景色は今までで一番鮮明で美しかった。顔を打ちつける強い風も恐怖に滲み出た脂汗も気にならない。純は昔に乗った、あのジェットコースターを思い出していた。落ちる一瞬に全てを奪われる。由紀子は怖がらなかったのではない。声が出なかっただけなのだ。そのことに十年経って気づいた。

純は重なった東城の手を強く握りしめた。東城も同じ力で握り返してくれた。まるで唯一の命綱みたいに必死になって。

詩
部
門

最優秀賞

虚夢に黎明を告ぐ

浅瀬 小夜／57

奨励賞

コドモノヒンコン

あさとよしや／61

ときに

藍原 知音／65

チヨコレート工場

瑠川 キヨ／69



*

*

詩部門

最優秀賞

虚夢に黎明を告ぐ

浅瀬
小夜

一人暮らしには少し広い1LDKは
洗濯物の山と書籍の塔で溢れ返っている
夢ばかり見ていた僕がもぬけの殻になって
FMラジオでは今日も同じニュースが流れる

県内でインフルエクス流行
警報が本日発表されました
県は、☆☆※やうがい等の
感染対策の徹底や積極的な
★※接種の検討を強く推奨

してい※△ご注意下さい…

都会のネオンライトは

ただ光っているだけだと知った

どれだけギターを鳴らしても

どれだけ遠くに歌っても

僕以外の時間は進み続けている

（今日も僕らはただの売れ残りか）

なんて言葉も、もう聞き飽きた

通勤ラッシュ、交差点は大渋滞

人も／ペットも／車も縦横無尽に横切る

僕がこのまま勢いよく突っ込んで

地元のニュースで取り上げられて

いつそこの街から、世界から消えてしまえら

とか安直に考えてしまっている

水平線に広げた羽は元に戻せなくなつた

オレンジ色に焼けた地面を這う蝶を横目に

お疲れ様でした、とだけ呟いてみる

学生時代のデータは文字化しているけど

花束は写真だから綺麗なんだった

昔の恋人が言っていたから

灰に埋葬した記憶を掘り返しながら

君と同じ場所に開けたピアスを撫でる

午前5時

カーテンの隙間から青白い光が伸びる

酸が抜けた缶ビールはテールで佇んで

食べかけのシチューには厚い膜が張っている

昨夜まで賑やかだった夏の虫たちも

静かに卵を産み、再び眠りについた

夏が終わる頃

来月分の家賃の未払い通知が届く

熱にうなされただけの僕の夢は蜃気楼となり

52 Hzの歌声は誰にも届かないまま

微粒子になつて気泡と混ざりながら
漆黒の海底へゆつくり淘汰されていく

詩部門

奨励賞

コドモノヒンコン

あさとよしや

あるお宅のお母さんが
飛び降り自殺した事件があった

イタズラ盛りの子供がアパートの屋上から
石を落とした 石は道路に停めていた車に当
たって車は傷ついた 車の持ち主の女が怒り
狂って 子供のお母さんを咎めた 高額な修
理代を請求した

思い詰めたお母さんは

アパートの屋上から飛び降りた

それから数ヵ月が経った頃

お母さんの幽霊がアパートの前に立っているという噂が広まった 子供はお母さんに会うためにずっとアパートの前に立って お母さんが現れるのを待った 何日も待った お母さんはいつまでも現れなかった そのかわりに地面からは明るい奇妙な唄声が沸き上がってきた

(キジムナーのような唄声だったという

そりゃ一体どんな唄声だ?)

子供がそのとき聞き取った奇妙な唄とは
こんなものだった

へソウ ボクハネ コドモノヒンコン
キミノトナリデ ヒンコンヒンコン

オカネナクテモ オチコマナイデ

キミガカナシム ボクモカナシム

ワラツテホシイヨ ホラ ワラエ

コドモノヒンコン ヒンコンヒンコンコン！

ダレモガ キミヲ ウトンジル

キュウシヨクヒ ハラワナイト ウトンジル

デモ ハズカシガラナイデ カオヲオアゲヨ

イツモ ボクハ キミノソバニイル

ダツテ ボクハ キミノトモダチダ

コドモノヒンコン ヒンコンヒンコンコン！

ナニガワルイ ハタラカナイ オヤガワルイ

ナニガワルイ オカネガナイ オヤガワルイ

キミハ イツモ クラクテ ゲンキガナイナ

デモ ソレ キット アツイセイ

ダツテホラ ココハ アネッタイ！ ソリヤ

モウ イキルキリヨクモ ナクナツチャウサ

コドモノヒンコン ヒンコンヒンコンコン！

こんな奇妙な唄を聞いた子供も
いまでは もう大人になったろう
はたして どんな大人になったろう

この話を私に教えてくれたおばさんも
お金に苦しみ、数年前に首を吊ってしまった
五人の子供たちと働かない夫を遺して

詩部門

奨励賞

ときに

藍原 知音

ときに

電脳空間の言葉と絵は

群像劇を知ることもなく

考察さえもすつ飛ばして

トリミング技術の向上をみせる

揺らぐ嘘を嘘で塗り固めて

曲がりくねった事実が誇らしげに笑う

誰かの識別情報を暴く下品な怪盗は

放火魔にすら成り下がる

「いいね」が誘発するアドレナリン

歪みにも思える文明の快樂が日々に溢れている
創り出されていく新たな快樂に
狂う人々が画面越しに生まれている

ときに

最悪のシナリオがなぞられた後に
揮発性の高い謝罪が並んで
赤の他人の容疑者が

こちらに何かを言い放とうと
指先でしゃべり出して

軽い軽い言葉が聞こえてきた

誰かが決めた醜さに怯えて
美しく歪んでいく

心さえも濁ってしまつたら
何を信じたらいいのだろう

液晶の画面の中は

何処までも深い海のように

酸いも甘いも満たされているから

水槽であることに気づかないふりをする

満ちた水中は輝きも恐れも息づいている

人の姿では息苦しいから

人魚になって生きていたい

幻想のような願いを抱いている

「信じているものが正義」と信じる茫漠たる信心深さは

罪悪感を抱いているのに誰にも裁かれない

善人だと自称できないけれど

悪人だと理由づけるのはとても容易い

仮面を付け替えて善人紛いを続けたら

誰も私を悪人だと言わない

ときに

救われることがある

涙を拭われることや

しょうもない笑顔を抱く

退屈な幸せが

なんでもない一瞬が

永遠に続いていることを知る

止まらないすべての波の中で

仮面のない私を思い起こせばいい

私がわたしであるための

そのときに

詩部門

奨励賞

チョコレート工場

瑠川
キヨ

液晶の上で指先スケート
指先から画面にずぶずぶ
両目から情報がどばどば
知らない人の知らない日常を覗いて
知らない人の知らない感性に塗れて
知らない人の知らない秘密を暴いて
悪癖へきへき
中毒どくどく
籠絡らくらく
ほらほら簡単

ようこそ

甘いチヨコレートの底なし沼

頑張らなくていいし

強がらなくていいし

気を張らなくていいし

踏ん張らなくていいし

しがみつかなくていいし

甘さに痺れてハマっちゃって

チヨコまみれの手足が宙ぶらりん

だれもあなたを貶さないわ

だれもあなたを責めないわ

だれもあなたを誉めないわ

だれもあなたを知らないわ

だれもあなたを見てないわ

甘さに溺れてキマっちゃって

チヨコまみれの手足が宙ぶらりん

これじゃあ蜘蛛の糸だって掴めないわ

出たいだなんて言わないで

悪いお口にはチヨコレートを流しましょう

外も内もチヨコレートで幸せいっぱいね

あなたの輪郭が溶けていくわ

あらあら個々はどこかしら

なになに最後に呟いて

やりたいも叶えたいも

遠くに退けられて

するべきとやるべきで

道が溢れて

世界が溢れて

わたしはずっと叫んでいる

わたしはこんな平凡じゃない！

そうそう全然わかってない

あなたはこんなところにいる人じゃない

でもでも仕方がないの諦めだつて肝心よ

いいねいいね全部忘れてしまいましたよう
チョコレートに溶かしてしまいましたよう

ダマを潰すように溶けてなくなつて
あなたはあなたとさようなら

ダマを潰すように消えてなくなつて
わたしはわたしと・・・

短歌部門

最優秀賞

人新世の示準化石

安里 和幸／73

奨励賞

祭り

玉城きみ子／74

大き陽のごと

神村 洋子／75

明滅するパルス

元澤 一樹／76

*

*

短歌部門

最優秀賞

人新世の示準化石

安里 和幸

「いつかまた、転生先の世界でも弑されたいわ。」アーニャは囁う

月面刑務所の看守も囚人も欠けた地球をじつと見つめる

人新世の示準化石となるかもね僕の精子を拭いたティッシュは

死と生のスコアブックを締めくくるヒト絶滅のサヨナラエラー

カタチナキモノサエ滅ぶ忘却ノ河ノ流レニ抗え。独りでも。

短歌部門

奨励賞

祭り

白保村の豊年踊りの輪の中ゆ仰げば蝶もなやかに舞ふ

茜雲なびく空の下白保村の弥栄ねがひ弥勒練り歩く

旗頭高く掲げる若者の士気はつらつと村を支へむ

世界一的那覇大綱を東西に引き合ふ声の平和引き寄す

綱挽きに顔を赤らめ屈まりて手綱引く手の勝利を掴む

玉城きみ子

短歌部門

奨励賞

大きな陽のごと

神村 洋子

祭壇のカサブランカの白き花夜の静寂を音立て落ちる

限りある命と知るも諦められず亡夫（つま）の影追う秋の夕ぐれ

困りごと相談するもただ笑みて遺影のネクタイビシッと決まる

幾度となく書き直して詠む一首「青春だね」と亡夫（つま）はにこやかに

夫逝きて一人生きぬくに何あらん大きな陽のごと明日を生きたし

短歌部門

奨励賞

明滅するパルス

元澤 一樹

母一人子一人今は僕だけの仏間で母の布団で
眠る

かさぶたをはがさぬようにかさぶたのまわり
の皮膚を傷つけている

死ぬように生きる生ききるように死ぬ仰向け
の蟬うつ伏せの僕

害虫用粘着シートにくっついたヤモリの腹の

ふくらむちぢむ

手相見た友人曰く僕は去年死でるらしい。
仏間で。母と

エッセイ部門

最優秀賞

十ぬ指やいぬたきやねえらん

當銘

学／79

奨励賞

平和への祈念／集團自決を心に刻んで

琴森

戀／86



*

*

エッセイ部門

最優秀賞

十ぬ指やいぬたきやねえらん

當銘

学

昭和三十年代、祖母の家は貧しかった。

家族は祖父母、末娘、母、私の五人家族だった。

毎日の食事は質素だった。普段は、さつまいもと野菜料理が主流だった。

唯一のご馳走は、家畜であつた豚、山羊、にわとりだった。

それらを大きな行事になると屠畜し食卓に並べた。

山羊の餌には野山の草をあげていた。草を刈るのは祖父の役目。孫の私は学校帰りリヤカーで

その草を運ぶのが日課だった。

祖母の家は、隣り近所のおじい、おばーの茶飲み所（サロン）だった。お茶を飲みながらたわいもない会話が盛り上がっていた。年寄りの生活リズムがゆったり流れているせいか、いつも笑いがあつた。

お客さんにお茶を出すのは孫である私の役目だった。茶菓子には決まって黒糖を出した。

入れ替わりたちかわり訪れる客にお茶を出していくと、当然お茶が薄くなる。それを見た祖母は「学よ、くれーちゃーやあらんどー。ゆたぬしーばいどやんどー。」（学よ、薄くなったお茶はお茶ではないよ。ユタの小便だよ。もつと濃いお茶を出しなさい。）と教える。

そこで学んだことは、もてなしの心とお年寄りを大事にすることだった。

その体験があり、大人になってからお客さんをもてなすことは進んでやるようになった。

まさに「やーなれーや、ふかなれー」（家で習ったものは外でも自然に出てきて、進んでやるようになる。）だった。

ある日の朝、近所のおばあさんが

「んす、からちきみそらんがーやー」（味噌を貸してくれませんか）と来た。そういうことはたびたびあった。

祖母は裏座の味噌樽から茶碗いっぱい盛って快く貸してあげた。

数日たつてもお返しがなかった。

そんなやりとりをみた母は愚痴った。

「じりはんだーどやる」（義理や恥もないおばあさんだ）

ところが、祖母は何も言わなかった。

「ねーんね、からすしがあたためーやさ」（困っている時は、貸すのが当たり前だよ。お互い様だよ）
「ねーんくとど、借いがちゅんどー」（ないから借りに来るのだからしかたがないよ）

祖父も「ねーんしんかいや、からちようけー。」

（お金や物がない人には貸してあげなさい）

「ぬーんち、くわつかすが」

（なんで出し惜しみするか）

祖父母は人間ができたというか、心が広い人だった。

夫婦喧嘩も聞いたことがなかった。

祖母がいつも言っていたのは、生活の貧しさからくるぐちではなく、戦争で失った最愛の息子への嘆きだった。

「やな、いくさがねーんね、かなしー息子をしなさんていんしむたぬむん。天皇陛下が憎い。」（戦争さえなければ徴兵検査に甲種合格した愛しい長男を失うこともなかった。これ程哀れなことがあることか。天皇が憎い）

時が過ぎ、他のお茶のみ友達のおばあさんが訪れた。

「ちやーびらさい」（ごめんください）

「めんそーれ」（いらっしませ）

「ゆきゆみそーれー」（ゆつくりして下さいよ）

「にふえーでびる」（ありがとうね）

「ちやーやが、はるぬむずくいや。」

（どうかね、畑の作物の出来具合は）

「あみんふらん、できらん」

（雨も降らないからではよくないさ）

ゆんたくが途絶えた頃、お客のおばーさんが口を開いた。少し間を置いて

「おばーよ、うにげーがあいびーん」

（おばーさん、お願いがあります）

「ぬーやが、えんりよさんぐといちんでい」（何かね、遠慮はいらないよ。言つてごらん）

「あんせーうんぬきやきびら」（それでは申し上げます）

「ちゃーからちきいみそれーり」

（お茶葉を貸してくださいませんか）とお願ひした。

「たましぬぎたん」（びつくしたさあ）

「うんなくとだつたのか。かんたんなことだよ。」（そんなことだつたのか。お安いご用だよ）

「なーひんへーくいえばよかつたのに」（もつとはやく言えばよかつたのに）

「あつたんにいいねー、たましぬぎいがすらとおもつたからよ」（急に言えば度肝をぬくと思つ

たから言わなかつたのよ）

「あんいちんあみ」（そんなことはないよ）

祖母は快く袋に入れて差し出した。

「にふえでびる」（ありがとうね）

「ちゃー、ぬでいいけー」（お茶を飲んで行きなさいよ）

「ちゅちゃわんちゃーやぬむせーあらんどー」（ひと碗のお茶を飲むものではないよ。二杯以上飲みなさい）

祖母は、二つの理由を知っていた。

まずひとつは、一杯だけ飲んで用件だけ伝えて急ぎ足で帰るのはその家相手に失礼になる。（せかせかしないで、もう少しゆっくりしなさいよ）

もう一つは、うちやとう（仏壇にお供えするお茶）は一杯限りだから縁起が悪いということになるからだよ。

「あんやみ、あんせー、なーちゅちゃわんくわっちーさびら」

（じゃ、もう一杯いたどうかね）

「とーかふしどー。くわっちーさびたん」（では、ごちそうさまね。失礼しようね。ありがとう）
と言つて借りていった。

何日かしてお茶を返しに来た。

祖母が言った

「けーさんていん、しむたぬむん」（返さなくてもよかったのに）

「あねーなさらんさー」（そうはいかないよ）

「ちゅから、むぬかていからや、けーすせあたためーやさ。」（ひとから物を借りたら返すのが当たり前だよ。）

「あんやみ、あんせーうきといんてえ」

（そうかね、それならば受け取るさ）

そんなやりとりを聞いて律儀だと思った。

サトウキビの収穫も終わり、農閑期に入った。

夕食を済ませ、一家団欒の時間を過ごした。

その晩、祖母は言った

「ちゆぬなかには、ひんすーもんもいる。うえーきちゆんいるさあ」（人には貧しい人もいる。金持ちもいる。色々な人がいるよ）」

「くまとーぬとちや、たしきーせーあたりめーやさ」（困っている人を助けあうのは、当たり前だよ）」

「むぬかいが、ちいねー、からすしが、あたためーやさ。ねーんくていど、かいる。けーすせーいちやていんしむき」（物を借りに来たら貸してあげるのが親切というものだ。借りに来るということはその物がないから借りにくるのだよ。返す時はゆとりが出たときに返せばいいさ）」祖母は一息ついてから次のことをこんこんと説明した。

「ゆーちきよ」（よく聞いてよ）

「にんじんや、十ぬ指（いーび）やいんたきやねーんど」

（人間の十本の指の長さはみな同じではないよ。長い指や短い指、太い指がある。人は、顔かたちがちがうのと同じように考え方も、価値観も皆違うんだよ）

また、「ちゆんでいせー、いぬくとあびていん、うきといぬひとによつて受けとめ方がちがい

んどー。」(同じことを言っても受け取る人によって解釈が異なるよ。言葉は選んで使うものだよ。気をつけなさいよ。)

「なーてーいーちーていしちなことをならーさやー」(もう一つ大事なことを教えようね。)

「馬や乗て知り、他人(ちゆ)はふいらてい知り」(馬に乗つてみなければその性癖が分からないように、人は寝食を共にしないとその人のことは分からないものだよ。)

このように祖母の知識や語彙力には目を見張るものがあつた。

ある日、ぼろつと漏らした。

「なまやいねー、高校のしんしーにないたんはじやつさー」

(今だったら、高校の先生になれたはずだね)

九十歳で亡くなる年まで「十番口説」(沖縄民謡)(一番、まじや一番命あるわる思てうる)ことかなわいる。…)の曲を十番までそらで歌えた。記憶力のすごさにびっくりした。

祖母から聞いた黄金言葉は無数にある。

私は祖母に教え育てられたお陰で含蓄のある諺や格言など沖縄のすばらしい文化を知ることができた。

今日あるのは祖父や祖母のお陰だと感謝している。

祖母が教えた黄金言葉は子や孫、後世まで伝えていきたい。

エッセイ部門

奨励賞

平和への祈念―集団自決を心に刻んで―

琴森 戀

私は一時期、沖縄戦について深く知る為、県内に偏在する戦跡巡りをしていた。

初めて訪れたのは、確か沖縄県平和祈念資料館だったと記憶している。常設展示で、行き場のない民間人が彷徨した、出口のない昏い道を追体験した。約二十四万人の戦没者の名前が刻銘された「平和の礎」の前で泣いているご遺族を目にした時は、何ともやりきれない想いで胸が押し潰されそうになった。

次に訪れたのは、ひめゆり平和祈念資料館である。大分以前に今井正監督作品の映画『ひめゆりの塔』や、舛田利雄監督作品の『あゝひめゆりの塔』をDVDで視聴した記憶があり、献花台の横に佇む石碑は苔生して、どこか寂しげに見えた。当時は「語り部」の方が交代で館内におられ、私が訪れた時は、元ひめゆり学徒の島袋淑子さんが戦争の証言をしてくださった。忌わしい体験を切実に語る姿は、使命感に満ち溢れていた。「生きている限り、戦争は絶対してはいけな

いと伝えていきたい」と話してくださいました。

記念館を後にして喜屋武岬に立ち、眼下を覗くと荒々しい海原が広がり、尖った岩礁に白波が激しく打ち寄せ、米軍に追いつめられ、岬の突端から身を投げて自決した女学生が居たのだと思うと涙が溢れた。

更に、沖縄県立第二高等学校の生徒から構成されていた白梅学徒隊の事を知り、白梅の塔に献花と祈りを捧げた。

学徒は女性だけではなく、男性で構成された鉄血勤皇隊を祀った「沖縄師範健児之塔」や、一中学徒隊資料展示室等の資料館も訪れた。まだあどけない顔立ちの少年達が残した、家族への遺書や毛髪、爪などの遺品が紙に包まれ、丁寧に保管されていた。中でも「召集令状」を初めて目の当たりにした時は、今は亡き祖父も、この召集令状を手にした事を思い出し、赤紙が非常に恐ろしく感じた。

他にも、旧海軍司令部壕（海軍壕公園）や、糸数アブチラガマ等も訪れた。アブチラガマの中では、ガイドの方から丁寧な説明を拝聴する事が出来、ライトを照らさないと足元も危うい岩場を、一歩一歩進むのがとても怖かった。岩肌には今も尚、黒々と火炎放射器の跡が残っており、暗がりの中で、ひめゆり学徒隊が寝る間も惜しんで看護活動をしていた事を知り、胸が痛んだ。

壕を出て、学徒隊が水汲みに歩いたとされる畦道を私も歩いてみたが、雑草が生い茂り足元が滑りやすく、幾度も転びそうになった。雨で毛布がズシリと重たい中、遺体を運ぶ姿を想像した。波の上近くの対馬丸記念館で、とある老婦人に出会った。関東から来ている老婦人が、涙を流

しながら壁面の子供達に謝っている。不思議に想い声をかけると、ご自身が対馬丸に乗る筈が、タイミングを外し乗り損ねた事で、運良く次の船で生き長らえたとの事だった。其れでも、未だに生き残ってしまったという申し訳ない想いから、此処に来ては、学友の皆に謝っているとの事だった。老婦人は十・十空襲のせいで家族と散り散りになり、今も那覇市内にあったご先祖のお墓を探しているとの事だった。もう自分も若くはないので、これが最後の沖縄旅行だと、悲しげに呟いた。戦争は地上ばかりではなく、海上でも悲劇はあったのだと改めて実感した。

そんな折、何時だったか失念したのだが、金城重明さんという方と知り合い、彼から一冊の本を贈呈された。本のタイトルには『集団自決を心に刻んで』沖縄キリスト者の絶望からの精神史』と書かれてある。著者である金城重明さんは渡嘉敷島の「集団自決」の生き残りとして、県内外の講演やメディアで証言をされていた方である。沖縄戦を基軸にした物語は非常に興味深く読むことが出来た。然しながら、著書の内容は、金城さんご自身が沖縄戦を自ら体験されて、その時代に翻弄されていく、凄惨な体験談であった。

戦時中「皇民化教育」の名の下、「方言札」と呼ばれる方言の禁止や明治憲法には「不敬罪」という罪名があり、天皇や皇族に対して行われた不敬行為は厳しく罰せられる仕組みになっていた。神棚には皇室の祖神である天照大神の御幣が安置され、柏手を打ち拝礼させられたそうだった。怖ろしいのは、軍歌や昼食時間に必ず歌う「箸取らば天地御代の御恵み、君と親との御恩を味わえ」という天皇讃歌を毎日反復させられた等、徹底した「宗教教育」による強烈な洗脳である。更に、沖縄の貴重な伝統文化である「琉歌」まで蔑まれ、徹底的に排除されるという異常の中、

思考停止をさせられた市民達はその洗脳に染まっていく。次第に、自分の文化や言葉、思想を全て奪われ「生きて虜囚の辱めを受けず」という様な洗脳思想と、激しい恐怖心が、金城さんを最も凄惨な「集団自決」へと導いていく。

本の一節には、「私達は『生き残る』ことが恐ろしかったのです。わが家は両親弟妹の四名が命を絶ちました。私はその時、十六歳と一ヶ月で、多感な少年でした。人間は死の恐怖に直面した時、“生きたい”という生への本能的欲求が強烈に働きます。しかし、生がより恐ろしい容貌を帯びて来る時、死に救いを求めるものです。キエルケゴールが、『死に至る病』の中で語っている次の言葉を思い起こします。

「死が最大の危険であるときには、ひとは生きることをごいねがう、しかし、さらに怖るべき危険を学び知るとき、ひとは死を願う」とある。

凄惨な集団自決の後、金城さんは生き残った。が、その後全滅した筈の日本軍と遭遇し、他の住民達が生存している事実を知り、「なぜ自分達だけが、こんな目に！」と、友軍に対する不信感と憤りが腹の底から込み上げてきた。と、記されている。もしも誰かが正しい情報を教えてくれていたなら、集団自決という最悪の悲劇は起こらなかったのだ。

その後、戦禍を生き残られた金城さんは、米軍の捕虜になるものの、棚原さんという熱心なキリスト信仰者との出逢いが転機となり、聖書を何度も読み返し、讃美歌を歌う事で、自らの傷ついた心を癒し、再び命の尊さや命の重さ、「命を愛する」という世界観に得心出来たのだった。

更に著書の中でオーストリアの精神医学者であるヴィクトール・E・フランクルの、ホロコー

ストにおける凄絶な体験も紹介されている。彼の著書である『死と愛』の中に「フランクルにとって重要な事は、自分は最早人生から期待するものを何も持っていないと絶望している人達に、人生があなたに期待しているとの発想の転換を与える事であった。（コペルニクスの転回とも言う）我々が苦悩する限り、我々は心理的に生き生きとしているのである。更に我々は苦悩において成熟し、苦悩において成長するのであり、苦悩は我々をより豊かにかつ強力にしてくれる」とある。私も学生時代に、ロマン・ポランスキー監督作品の映画『戦場のピアニスト』や、ヴィクトール・E・フランクルの『夜と霧』を読み耽った事もあり、それを基に制作されたアラン・レネ監督のドキュメンタリー映画も観た。モノクロームに包まれたフィルムの中で、大量の遺体やガス室の中の映像から、死の香りが沈鬱に漂い、強制収容所で亡くなった人々の無念さと、人間の根底に持つ残忍性や、選民思想の持つ危険性や、洗脳及びその集団心理について熟考した記憶がある。金城さんは、絶えない努力と、揺るがない信仰心の元で、キリスト者として苦しみから遁走せず対峙し、恐怖やトラウマを克服された後、最終的には「解放した」とある。

又、沖縄キリスト教短期大学創設以来、教授や名誉教授としても、ご活躍されていた。

実は金城さんから本を頂き拝読した後、非常に感銘を受けたものの、直ぐに感想をお伝え出来ぬまま、あつという間に数か月が経ってしまった。

二〇二二年七月十九日、九十三歳で金城さんは、亡くなられた。身を挺して戦争の悲惨さを訴え続けた彼の尊い行動は、絶対に風化させてはならないと憶う。この著書を一人でも多くの方に読んで頂きたいと、切に願う。

二〇二三年は沖縄戦から七十八年となり、戦争を体験された人々が次々と亡くなりつつある。「語り部」が少なくなる中、残された私達に一体何が出来たのだろうかという想いを馳せる。記憶を風化させる事無く、戦争体験者の想いを、若い世代の人々が、其々出来る限りの努力をもって、受け継ぐ気持ちを決して忘れてはならないと改めて強く心に誓う。

【参考文献・資料】

金城重明著『集団自決を心に刻んで―沖縄キリスト者の絶望からの精神史』（高文研）

ヴィクトール・E・フランク著『死と愛』（みすず書房）

ヴィクトール・E・フランク著『夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録』（みすず書房）

キエルケゴール著『死に至る病』（岩波文庫）

一般社団法人養秀同窓会『一中学徒からのメッセージ―遺書に託された恒久平和への道―

俳句部門

最優秀賞

地球忌

安里 和幸／93

奨励賞

島に生まれる
ジュゴンと恩納森
鷺の初音
白き骨

外田 さし／94
田中 直次／95
花木 詩香／96
本村 隆信／97



*

*

俳句部門

最優秀賞

地球忌

安里
和幸

刑死後の極暑に熔ける鉄条網

密葬の柩の部屋に蟬の声

旱天に忌の連続の暦あり

夏蝶や都市の亡ぶを見よ告げよ

歳時記に「地球忌」と足す天使かな

俳句部門

奨励賞

島に生まれる

外田 さし

岩田帯巻くうりずんの息深く

胎動のなほ鳴響みけり沖縄忌

香水か臓器に触るる助産師に

夏怒濤子宮から出て褒めらるる

エイサーや曾祖母となる祖母の顔

俳句部門

奨励賞

ジュゴンと恩納森

田中 直次

辺野古浜骨のジュゴン西日浴び

開鐘か三線バチはジュゴン骨

ナビー哭くバードストライク恩納森

世界悲慘クイナの口にUSA缶

溶ける夏蟬も落ちる三十四度

俳句部門

奨励賞

鶯の初音

花木
詩香

親ごころ伝ひ歩きと初音かな

片隅に紫式部花咲けり

芭蕉布を亡母と手織りし夕間暮れ

エイサーの鐘反響す壕の洞

竹節虫や連理の枝となりてをり

俳句部門

奨励賞

白き骨

本村
隆信

冴返り冴返りつつ基地負担

名月の指図か闇の指令劇

激戦地跡の断崖石露の花

秋冷や洞窟^{ガマ}に残れり白き骨

護差丸の討たれし地なり彼岸花

琉歌部門

最優秀賞

宮城 里子／99

奨励賞

大城 和子／
前原 武光／101100

*

*

琉歌部門

最優秀賞

宮城
里子

黄^く金^が色^{にい}か^るわ^るて^い

命^ぬ育^ちし^だで^いる

飛^とび^た立^ちゆ^る蝶^は

し^ばし^待た^まな

琉歌部門

奨励賞

露^{ちゆ}かみて咲^さちよる彼岸^{ひがん}花^{ばな}出^い会^{ちや}い一時^{ちゆとち}語^からなや
歩^{あゆ}み止^とみて

大城
和子

琉歌部門

奨励賞

サ
ワ
フ
ジ
の
花
に
一
夜
宿
借
や
り
露
の
涙

ち
り
て
い
ち
い
ち
う
て
い
る
ち
ゆ
め
な
み

連
れ
て
消
え
落
て
る

前原
武光

最優秀賞受賞者コメント

エッセイ部門

當銘

学／
103



*

*

エッセイ部門

最優秀賞 受賞者コメント

當銘 学

私は、幼い頃祖父母の家で育った。

何よりも幸いだったのは、祖父母の家は地域のお年寄りのお茶飲み所・サロンだったこと。そこで飛び交う会話（方言）を耳にしたことで、方言が聞けるばかりか話せるようになった。

祖母は九十歳で亡くなった。その時まで認知症を患うこともなく頭はシャープであった。ゆったりした時間の中で夜な夜な沖繩の諺や格言など教えてくれた。私はその都度メモし、機会ある毎に題材として発表してきた。

普段本を読んでいる気配もない祖母は、どこで学習したのか不思議でならなかった。適宜、的を得た諺や格言を発したことには驚きであった。また、記憶力のすごさには目を見張るものがあった。夕食後たびたび私を諭すように「ゆーちきよー。十ぬ指やいぬたきやねらんどー」等と教えた。今日の私を育てるきっかけになった気がする。

小学生から中学生の多感な時期に沖縄県の文化（諺、格言など）黄金言葉が聞けたのは幸運かつタイムリーで大きな宝物を得た思いがした。どの言葉も血となり肉となり生きるヒントを得た。祖母から聞いたことや体験したことは私だけでとどめておくのはもったいない。家族や後世に残すのが私の役目だと思いアウトプットしている。

ひと味違う文章を書きたい時、祖父母から教わった黄金言葉を引用する。

世の中には琉歌や諺、格言などの文化の宝が埋もれている。それを掘り起こして後世につなきたい。そのことがいろいろな立場の人々の今を生きるヒントにつながると思うからである。

早速祖母の好きなかんとお餅、祖父の好きなお酒をお供えし線香を上げ「おじーおばー最優秀賞頂いたよ。おじーおばーのお陰だよ。ありがとうね。これからも見守ってよ」と感謝を込めて報告した。

選
評

小説部門	小嶋 洋輔／105	玉代勢 章／109	あずさゆみ／112
詩 部 門	屋良健一郎／116	西原 裕美／118	
短歌部門	おおしろ建／121	吉川 安一／129	
エッセイ部門	小嶋 洋輔／124	小番 達／126	吉川 安一／129
俳句部門	屋良健一郎／132	おおしろ建／134	
琉歌部門	波照間永吉／137	照屋 理／140	



*

*

第四回名桜文学賞選考経過及び選評

【小説部門】

「リアルに書けているからこそ」

小嶋 洋輔

第四回名桜文学賞は、応募期間を二〇二三年九月四日から十月二七日までと設定、結果八編の小説作品が寄せられた。その小説作品を、選考委員三名で審査し、奨励賞二編とした。選考の経過は以下の通りである。

選考委員…あずさゆみ（作家）、玉代勢章（作家）、小嶋洋輔（名桜大学教授）

・八編の小説を選考委員各自で読み、首席、第二席（場合によっては第三席）を選出

・一月二日（金）に沖縄県市町村自治会館会議室で、選考委員会を開催し、それぞれ講評を行った。そして審議の結果、奨励賞二編とした。

昨年よりも少ない作品数に落胆しつつ応募作を読み出したが、楽しんで読むことができた。誤記や体裁のミスが例年より少なく、しつかりと推敲されている作品が多かったように思う。だが、順位を付ける作業に移ると、途端に苦しくなった。

「これが良い」と思う作品は、あつという間に決めることができたのだが、そこから先が進まない。どの作品も、利点とともに難点が出てきてしまうのである。これでは、選考委員会で推し切ることができない。当日選考委員会の会場に赴くと、他の委員の先生方も同様の気持でおられたことが判明した。しかも選んできた作品もほとんど重なっていた。奨励賞となった二作品は、そうした作品である。

まず「落ちて、た」に言及したい。主人公の純は母子家庭で育ち、「家族の中には男がいない」存在として描出されている。純にとつて、若い母親である由紀子は「きらきらと輝く美しい宝石のよう」な存在であったが、純が成長するに従って「見せびらかしたいもの」から「誰の目にも届かないよう」「閉じ込めておきたい」存在に変容したという。「母」に「女」を感じる一七歳男子の心情を、この作者は入念に追う。同時に友人である同性の東城に「父」なるものの影を感じ惹かれてゆく、そうした同性愛的な心情もリアルに描けている。こうしたある意味「揺れ動く」、主人公の心情を読者に飽くことなく追わせることができることはかなりの技量が必要であり、この作者はそれを有しているといえる。

だが、というべきか、だからこそというべきか迷うところであるが、細部が気になった。作者はこの一七歳の男子高校生に寄り添い、すべてを理解しているようでいて、よく分かっていない

のではないか。この時期の男性にある「どろどろしたところ」が描ききれていないように感じてしまった。この純について、キャラクターとしては把握しているが、「人間」としては把握していないような。選考委員会で議論になったのが、純が、酒を飲み下着姿で眠りかけている母の身体に触る場面であったことからそれがわかる。紙幅の関係上、これ以上ここで詳述することはできないが、この「どろどろした」欲望が描けていたならば、大学主催の賞であってもこの作品を推すことに躊躇はしなかったと思う。

次に「溶けないかき氷」である。いわゆる「陰キャ」の「僕」が主人公であり、その一人称によつて語られる作品である。この「僕」による自身に対する分析とか心情描写はリアルで、「僕」という「人間」が読者の前にしつかり立ち現れていると感じた。たとえば冒頭の一文、「あの子は何味のかき氷が好きなんだろう」という「僕」の疑問からだけでも、「僕」という「人間」が見えてくる。その上で、かき氷の一般的なシロップが、色が違うだけで味はどれも同じという情報を加えれば、この問い自体が不毛なものであることがわかる。だが「あの子」のそうした部分でさえ気になるのが「僕」なのであり、青春だということを上手く書いています。

そうした「僕」がリアルに描かれるのが、迷い犬を「陽キャ」の二人と追う場面といえる。迷い犬を追い詰めながらあきらめてしまう僕の心情、その言い訳、犬を捕まえた際に「僕」が感じる触感。こうした場面場面の積み重ねを描くことで、「陽キャ」の二人と「僕」との距離が縮まるさまを婉曲的に写しだしている。だが、同時にこの場面にもう一つ別の盛り上がりがあればと感じてしまった。

選考委員である私は、日常のある場面を切り取りその空間の中に生きる人間の心情を切り取る、この二作品のような小説が正直好みである。だが、やはり、どんなに小さなものであれ文学賞への応募作品であることは忘れてはならないと思う。文学賞は賞レースであり、どうしても応募作品の書かれた意図、そして読む意義を求めてしまう。奨励賞となった二作品とも、リアルに書けているからこそ、「もう一声」と思ってしまった。

さて、名桜文学賞も今のかたちになり四回が経過した。不安なのはその知名度が中々高まらないことである。とくにというか、逆にというか、名桜大学内での知名度が低いことは問題ではないか。五回目に向けて色々な「仕掛け」が必要に思う。

（こじま ようすけ／名桜大学国際学部 教授）

青春小説と男同士の性愛物語

玉代勢 章

☆奨励賞「溶けないかき氷」 狩俣 啓

男子高校生三人と女子高校生ひとりが登場する青春小説である。主題は友情と淡い恋心だ。内面を単純化せずに複合的多元的に捉えていて感服した。また関係や感情を固定せずに、ゆつくり変容させる展開もいい。小説冒頭に登場する奈々子の中盤にも話題にし最終章でなまの奈々子を出現させる手腕は憎い。

弱点を言えば人生や生き方や存在の重み・深みがないので読後の余韻が軽くて浅い。

☆奨励賞「落ちて、た」 山田

青春の迷いと苦しみと性愛を描いている。

主人公は高校生の純（男。十七歳）だ。重要な登場人物として健人（同級生）と由紀子（純の母）がいる。純には父がいない。母は十七歳で純を産んだ。純は母と二人でアパートに住んでいる。純と健人は性愛関係にある。

由紀子の寂しさや純の空虚感・迷い・不安など、よく書けている。

弱点を言えば、小説が母親との性的接触と健人との同性愛関係、二つに分裂している。そのため、それぞれが十分な深みに達していなくて物足りない。どちらかに絞って生きていることの不

安や寂しさや性愛の喜びを、もつと激しく、もつとなまなましく描くとよい。

☆「がんばれ！モスキーター」

小説の前半は自殺などの話で後半は少年野球の話だ。前半と後半が分裂していて繋がりが無い。また前半は観念的抽象的であることが欠点だ。後半は話が駆け足になっていて、あらずじだけ読まれたという印象を与える。

登場人物の個性と内面を具体的に肉付けすること、いくつかの流れが最終章で一つに合流して怒濤になるように展開できると最高だ。

☆「平安座ハツタラー三線」

謎を設け、謎を追いかける構成と展開になっていて引き込まれた。だが、その謎に重大な意味や価値が乏しいので感動が高まらない。

☆「新月前夜のラブソディー」

①誤字が多い。②暗示的な短い詩に思いを託すのではなく具体的な事件を積み重ね、同時に人間の内面を明らかにする文を綴って表現するとよい。③星座の解説が多すぎて読者を退屈させる。作者が星座にこだわるならば、星座に関心のない読者をも引きつける細心のくふうをほどこさなければならぬ。④事件も登場人物も多すぎる。そのため話が散り広がって盛り上がらない。事

件の数を二つか多くとも三つに削り、登場人物も二人か多くとも三人に絞るとよい。そして多面的に独創的に新鮮な視点に立って深く描くことが大切だ。

☆「帰り道」

獅子頭の戦争責任など興味をそそる箇所があった。だが難関大学に合格したと勝ち誇っている点、小学一年生の発言としては成立不能な箇所が存在する点、女性の外観の美醜にこだわったり女としての媚びを売って歓心を得ようとしたりする点に私は不満がある。

☆「万国津梁の鐘」

約六百年前の琉球史を題材にしている。面白い場面がある。だが（激動し不安に満ちた）今日の沖繩を生きる者に人生の示唆を与えない。話として面白いというだけでは寂しい。

☆「猫に恋してしまった!」

内容があまりにも軽すぎる。浅すぎる。表面的な面白さとおかしさにとどまっている。青春とか愛情とか性交とかの意味を多面的に深く洞察して小説を作ってほしい。

（たまよせ あきら／小説家・文芸評論家）

あずさ ゆみ

第四回の名桜文学賞では、八編の応募があった。残念ながら大賞は出なかった。

佳作には『溶けないかき氷』『落ちて、た』の二作を選出した。まずこの二作品について述べる。

『溶けないかき氷』

陰キヤの主人公が、陽キヤの同級生二人と心を通わせていくという流れは、爽やかで楽しめた。細部の描写もていねいで、主人公が陽キヤへ向けるあこがれと軽蔑のないまぜになった感情も、うまく書けている。ひょんなことから二人と協力して犬を捕まえようとする流れも面白い。始まりと終わりがきれいつながっている構成もよい。

一方で、読んでいて文章のところに引っかかるところがあり気になった。また、犬を追いかけてかまえるまでのシーンが冗長で、説明過多になっているように感じた。ここを短くして、もう一エピソード入れるなどしたら、より話に起伏ができたのではないか。

『溶けないかき氷』というタイトルは面白いと思ったが、内容的に『溶けない』ではなく、よりしつくりするものに変えたほうが良いと感じた。

『落ちて、た』

同性のおさなじみとの恋愛と、母親への屈折した愛情の狭間で、「ふつうでない」と悩む「僕」

の心情が描かれている。

文章はソツなくきれいにまとまっており読みやすい。ちよつとしたエピソードにリアリティがあり、こなれているという印象を受けた。今回の応募作の中で一番うまいと感じた。

しかしながら、同性愛、近親相関などの重いテーマを描くには、この淡々と抑制のきいた文体では物足りないようにも思われる。いっそ耽美方面にと開き直ってみるのもよいかもしれない。

タイトルの『落ちて、た』も内容とずれている気がした。何かが道に落ちていたような印象を受ける。

そのほかの作品について、印象に残った順に述べる。

『帰り道』

獅子頭の発見という実際にあつたニュースを題材にしているところがよい。

少女の抱える悩みが表面的なので、読者が共感できるようにもつと深みを持たせたら、さらによくなったと思う。

沖縄を舞台にしているので、帰り道の風景の描写なども、より沖縄らしさを強調させたらよいと感じた。

『新月前夜のラブソディー』

自分も天体が好きなので、星への愛に満ちているところに好感が持てた。著者は星のエッセイ

や詩などが向いているのかもしれない。

磨土香という名前は奇抜すぎてどうかと思った。

『がんばれ！ モスキーター！』

野球が出てくるところから急にテーマが変わってしまい、置いてきぼりにされた気がした。タクシーに乗りこむあたりまでの流れはよかった。

『平安座ハッタラー』

昔語りのところが特に説明過多になっている。また、会話での説明が冗長だ。

『万国津梁の鐘』

沖繩が舞台の歴史ものなので期待したが、残念ながら新しい視点などは見つけれなかった。登場人物が紋切型なので、もっと肉付けが必要だと思う。

『猫に恋してしまった！』

冒頭から、なぜ高校生が大学進学の塾でバイトをしているのだろうか？ など設定に疑問なところが多すぎて、話に入り込めない。

これだけの分量の作品が書けるのなら、書きたいというエネルギーは相当なものだと思う。そ

のエネルギーを細部の描写などに向けてほしい。

今回の応募では、もつと枚数を削れるのではないかという作品が多かったように思う。応募要項は三十枚以上なので、削れるところはどんどん削ってほしい。特に会話では、長いとテンポが悪くなる。

次回の応募作に期待している。

（あずさ ゆみ／作家）

【詩部門】

屋良 健一郎

詩部門は西原裕美氏、おおしろ建氏、吉川安一氏、私の四名で選考を行った。各自、事前に良いと思った作を選んでおき、選考会当日は二名以上の選考委員から推薦があった作を中心に議論がなされた。

最優秀賞は「虚夢に黎明を告ぐ」。都会の中の孤独、空虚さを述べた作である。ラジオから流れるニュースを描いた箇所は、記号を使用することで現実への諦観や「ながら聴き」の状況を感じさせる。特に良いと思ったのが「酸が抜けた缶ビールはテーブルで佇んで／食べかけのシチューには厚い膜が張っている」という部分である。この写実的な描写があることで、抽象的な詩に終わることなく、現実の手触りが生まれ、作品は奥行きを獲得している。

奨励賞は「コドモノヒンコン」「ときに」「チヨコレート工場」の三作である。「コドモノヒンコン」は、途中で挿入される「ヒンコン」の唄がリズムを生んでいて、そのリズムによって諷刺が力を持つ。ただ、「おばさん」の自殺という終わり方は物語としてきれいにまとめ過ぎた感じもして、賛否がある。「ときに」はやや理屈っぽく、比喻もきどった感じがしないでもないけれど、二聯目、六聯目の冒頭の「ときに」がリズムを作り、理屈を詩にする。「コドモノヒンコン」も「ときに」も韻律をうまく使いこなした作だと思う。「チヨコレート工場」はきれいに流れ過ぎてしまい、読者が立ち止まるところが少ないように感じる。オノマトベが効いているからだとも言え

るが、読後の印象はやや淡いか。

今回、個性的な応募作が多いように感じた。なお、毎年のことではあるけれど、誤字や脱字が気になった。作品を出す前に、もう一度、確認して欲しい。来年は「名桜文学賞」第五回の節目、どのような作品に出会えるか、楽しみだ。

（やら けんいちろう／名桜大学国際学部 上級准教授）

西原 裕美

今回は詩部門に十二作品の応募があった。応募数は少ないものの、何度も詩を書いてきたのだろうと感じられるレベルの高い作品が多かった。

最優秀賞の「虚夢に黎明を告ぐ」池間美月は、ほとんどの選考委員が最終選考に選んでおり決定した。若者の抱える虚無感のような空気が、置きっぱなしの缶ビールなどの情景描写とともに伝えられる。言葉にできようもない感覚や感情を、詩の描写に載せられているのが良い点だと思う。

奨励賞の「コドモノヒンコン」あさとよしやは、二人の選考委員が最優秀に選ぶほど印象的な作品だった。惜しくも最優秀は逃したものの、実力を感じさせ、また訴える力もある作品である。ただ、あさと氏が素晴らしい書き手であることは大前提として、あくまでも私個人としての感想だが、詩が既製品のように感じられた。真摯に向き合い理解した上で描いたものだろうか。内容を膨らませきれいな印象も受けた。そのような迷いの中で、最優秀に選出することができず、今回は奨励賞となった。

「ときに」藍原和音は、ネット上の世界に人が振り回され苦しみながらも、その世界に救いを

得られることもあるという葛藤を感じさせる。選考委員からは「今の若い人はこのような葛藤も抱えているんだろうと思う」との声もあった。そのような中で「私」を保つことの難しさにハッとさせられる。

「チヨコレート工場」瑠川キヨは、作品のイメージも面白いが、オノマトペが印象的でリズムカル。しかし、そのようなイメージだけでなく、表現したいことが本人の中できちんとある印象も受ける。

惜しくも入賞は逃したものの、「うくらいな」森山高史、「いのり」外田さし、「六等星の花」にふじ、「雨」桃原美空も最終選考に残り、どれも高い評価が得られた。

今年度の応募作品数はそれほど多くないものの、実力や才能を感じさせる作品が多く、選ぶのは非常に難しかった。他の審査委員も同様のことを選考会でおっしゃられていた。今回入賞しなかった作品も、入賞した作品も僅差であり、今後も書き続け応募をして欲しいと願っている。こうやって選考評を書きながらも、本当にこの決断で良かったものか悩んでしまいそうになる。詩の世界はそれが面白い一方で難しい。また、私は選考をさせて頂くのは4年目になるが、応募してくれた詩人の生活の変化も垣間見える。もちろん、選考の段階では、誰が描いたものかは伏せて行われるが、作品を選んだ後に気づく。きっと、これまで描いてきた風景とは違う感覚を、自

分の言葉に落とし込んで詩に変換していくことは難しいだろうなと想像する。また、ある程度自分のスタンスや書き方を確立している方は、自分の書き方の中で、より良いものを生み出していくことの難しさもあるように思う。選ぶ方としても、つつい昨年度に提出された作品を思い浮かべて成長が見られるかを気にしてしまう。自分の作品をワンランク成長させるには何が必要なのか、その手段は人それぞれだし、方法を探すことも難しい。しかし、今後も追求し続けて、より良い作品が読めることを楽しみにしている。

(にしはら ゆみ／詩人)

【短歌部門】

おおしろ 建

「第四回名桜文学賞」の韻文は、詩部門十二作品、短歌部門二〇作品、俳句部門十八作品の応募があった。選考会は名桜大学の図書館で実施した。短歌部門の審査は西原裕美氏、吉川安一氏、おおしろ建の三人で行った。西原裕美氏は鹿児島からのリモート審査であった。短歌部門は五首で一作品の応募。五首をまとめたタイトルを付けることになっている。選考の手順は各審査員がそれぞれ、推薦の三作品ずつを挙げ、挙がった作品を中心に論議した。選考は作者名や年齢などを伏せて行なった。最優秀賞は安里和幸の「人新世界の示準化石」であった。安里氏は俳句部門でも「地球忌」で最優秀賞に輝いており、稀有な才能を感じる。奨励賞の元澤一樹は「第三回名桜文学賞」の俳句部門の最優秀賞を受賞。若い二人の才能を発掘した感じで、喜ばしい限りだ。

最優秀賞「人新世界の示準化石」安里 和幸（あさと かずゆき）

月面刑務所の看守も囚人も欠けた地球をじっと見つめる

人新世の示準化石となるかもね僕の精子を拭いたティッシュは
生と死のスコアブックを締めくくるヒト絶滅のサヨナラエー

五首から三首掲載。作品は五首とも人類滅亡後の世界を描くSF的創造力の作品である。一首

目。月面から地球が滅亡する瞬間を見ていたのだろう。その月面は今や刑務所になっている。地球から追放された流刑者たちが、逆に地球の滅亡を寂しく眺めるのである。二首目。地層の地質年代を決定する指標となる化石が「示準化石」。人類は一度滅び新しい時代になっているのだろう。その地質時代を決定する示準化石が「精子を拭いたティッシュ」というのがブラックユーモアとなっている。三首目。人類は滅びるのか生き延びるかの瀬戸際にいる。だが、大きなミスをしてしまい「絶滅のサヨナラエラー」をしてしまった。人類への警告の一首であろう。

奨励賞「祭り」玉城 きみ子（たまき きみこ）

五首とも祭りの一場面を切り取って見せる。《茜雲なびく空のもと白保村の弥栄（いやさか）ねがい弥勒練り歩く》。石垣島の白保村の豊年祭の時の「弥勒踊」の場面。空には茜雲がなびいている。地上では弥勒に仮装して踊りながら村中を練り歩く。村がもつと栄えることを願いながら《旗頭高く揚げる若者の土気はつらつと村を支へむ》。村々の繁栄を込めて作られた旗頭が空を突き上げゆらす。若者の土気の高さを象徴する旗頭。若者と旗頭が村を支えている。

《世界一的那覇大綱を東西に引き合ふ声の平和引き寄せる》。世界の至るところで戦争や紛争が絶えない。那覇大綱の引き合う声で平和を引き寄せよと願う。きっと世界一の平和だろう。

奨励賞「大きな花のごと」神村 洋子（かみむら ようこ）

亡き夫を悼む短歌五首。《祭壇のカサブランカの白き花夜の静寂を音立て落ちる》。大きな花で

濃厚な香りを吐き出すカサブランカ。闇を香りと花色で白く染める。やがて夜の静寂を破り音を立てて落ちる。それは作者の絶望の音なのだろうか。

《幾度となく書き直して詠む一首「青春だね」と亡夫はにこやかに》。若き頃の夫婦の会話を懐かしく思い出しているのだろう。推敲を重ねる妻に笑顔で「青春だね」と問いかける夫。

《夫逝きて一人生きぬくに何あらん大太陽のごと明日を生きたし》。一人になっても、前向きに懸命に生きようとする作者。「大きな太陽のごと」に決意の大きさや希望を感じる。

奨励賞「明滅するパルス」元澤 一樹（もとざわ かずき）

生と死を複眼で見る五首。《母一人子一人今は僕だけの仏間で母の布団で眠る》。独りぼっちの寂しさが仏間を冷たく占める。「母の布団」が救いであるが、よけいさみしさが募る。

《死ぬように生きる生きるように死ぬ仰向けの蝉うつ伏せの僕》。蝉と対比する発想が良い。仰向けで死んでいる蝉に思いを馳せる。蝉は自由に生き、そして自然に逆らわずに死ぬ。一方で、僕はうつ伏せのままだ。僕はどうすべきだろうか。

《手相見た友人曰く僕は去年死んでるらしい。仏間で。母と》。生と死が交差する奇妙な発想の短歌だ。母親の死を認めることができないのだろうか。句点に、想像が掻き立てられる。

（おおしろ けん／沖縄国際大学非常勤講師）

【エッセイ部門】

小嶋 洋輔

第四回名桜文学賞（エッセイ部門）は、応募期間を二〇二三年九月四日から一〇月二七日までと設定、結果八編のエッセイが寄せられた。その作品を、選考委員三名で審査し、最優秀賞一編、奨励賞一編とした。選考の経過は以下の通りである。

選考委員…吉川安一（名桜大学名誉教授、詩人）、小嶋洋輔（名桜大学教授）、小番達（名桜大学教授）

・八編のエッセイを選考委員各自で読み、首席、第二席（場合によっては第三席）を選出
 ・一二月七日（木）に名桜大学付属図書館会議室で、選考委員会を開催し、それぞれ講評を行った。そして審議の結果、最優秀賞一編、奨励賞一編、とした。

今回の選考委員会はあつという間に終わった。選考委員でほとんど意見のズレが生じなかったのである。結果最優秀賞に「十ぬ指やいぬたきやねえらん」が決まり、奨励賞に「平和への祈念——集団自決を心に刻んで」となった。

「十ぬ指やいぬたきやねえらん」は、九十で亡くなった祖母から、孫の立場で聞いた「黄金言葉」を記しつつ、それに付随する思い出を語ったエッセイである。言葉の羅列でありながら、祖母の性格や人生が浮び上がってくるような書きぶりで、面白く読めた。こうした個人の記憶の記録は

重要である。戦後の沖縄に生きた祖母の、その発した言葉を残すことは、沖縄の記憶を残すことにつながる。そこで一点、コメントをするならば、今回は祖母の言葉の方言表記をひらがなで行い、その後ろに括弧書きで共通語訳を付すというスタイルを取っているが、ここに工夫が必要のように感じた。淡々と流れて行ってしまうので、読者を立ち止まらせる仕掛けが必要だと思う

「平和への祈念―集団自決を心に刻んで」はよく調べ、そしてよく考えたエッセイであった。「私」が沖縄戦について調べる足取り、読書によって得た知見、その時々的心情を詳細に書くことで写している。そして戦後七八年の現在について「私」は考えてもいる。だが、そうした「私」の心情に、いわゆる「独自」な部分があればさらによかったと思う。

また、賞からは漏れたが、「ペーパードライバー」は好みのエッセイであった。車社会の沖縄に移住してきたペーパードライバーの奮闘をコミカルに描いていた。それでいて沖縄の今を写しているところもあり面白く読めた。

選考委員としてエッセイとは何かを問い続けながら第四回まで行ってきたが、そろそろ本賞について改善をはかる必要があるかもしれない。応募作が充実してきているからこそその改善である。名桜文学賞ならではの、といった部分を求める必要があるのでないだろうか、などと漠然と考えている。

(こじま ようすけ／名桜大学国際学部 教授)

【エッセイ部門】

小番 達

今回のエッセイ部門には八編の応募作品があった。前回の十四編、前々回の十二編の応募に比べると少し寂しく思った。しかし、審査終了後、幅広い年齢層からの応募があったことを知ってうれしく思った。応募してくださった方々にお礼を申し上げたい。

さて、最優秀賞を受賞した「十ぬ指やいぬたきやねえらん」という作品は、祖母の日常とその中で言行を語るものである。その文章は短いセンテンスを重ねた地の文と島言葉による会話から成るところに特徴がある。決して豊かとはいえない暮しの中で他者を思い遣り、助け合う祖母の人柄や信条がわかりやすく読み取れる。そして、その基底には祖母に対する書き手の深い敬愛の念があることも感じられる。特に評価したいのは、現代社会が取り組むべき問題に通じる祖母の言葉をとり上げている点にある。タイトルにもなっている「十ぬ指やいぬたきやねえらん」(十指の長さや太さが違うように人間の価値観は様々である)、また、「馬や乗て知り、他人はふいらてい知り」(馬の性格は乗ってわかるように人間は付き合ってみて理解できる)という言葉は多様性や共生の問題につながる。さらに「いぬくとあびていん、うきといぬひとによって受けとめ方がちがいんどー」(同じ言葉でも受け止め方は人によって異なるから注意が必要である)はSNS等の誹謗・中傷の問題にもそのまま当てはまる。まさに現代を生きる我々にとっても黄金言葉となる。その一方で、課題としてあげられるのは、島言葉をもっと絞り込んで用いることで黄

金言葉がより強調されたのではないかという点である。また、作品のはじめに描かれる生活の回顧部分と、後半の祖母の教訓へと展開する構成にはもうひと工夫あってもよかったと思った。

次に奨励賞受賞作の「平和への祈念」集団自決を心に刻んで」は、今回の応募作品の中でも筆力のある作品だと感じた。導入部の様々な資料館や戦跡を訪れての情景や人との出会い、そして、その折々の書き手の心の裡が確かな筆致で丁寧に書き込まれている。また、サブタイトルにも示された金城重明氏の著書から得たものが、他の関連文献を引用し、自己の体験（読書や映画鑑賞）も交えながら記述されている。これによって金城氏の著書の単なる感想に終わることなく、自身の学びとなり、誓いへと繋がっている点に見るべきものがあつた。ただし、課題もいくつか見出せる。前半の戦跡等をめぐる記述と後半の金城氏の著書に関する記述のつながりが弱いように感じた。集団自決の問題に焦点化した構成をとった方がよかったか。また、段落分け（改行の仕方）の不備や一文中での同義語の重複など細かなところで気になった箇所があつた。

過去の選評でも何度か指摘した内容であるが、以下に改めて記しておきたい。エッセイに求められるもののなかには、日々の生活の中にあつて誰もが見逃してしまうような出来事、事物に注目する「観察力」、そこから自身の思いや考えを展開、派生、深化させていく「思考力」、そして、その思いや考えを読者にわかりやすく伝える「文章力」があると考ええる。この三つの力を養うには、エッセイを含めた様々な文章に数多く接すること、そして、文章を書き続けることが肝要だと思う。

最後になるが、受賞されたお二方には心より讃辞を送りたい。今後ぜひ書き続け、よりよい

作品を創り出していただきたい。また、惜しくも選外となった方々も更に研鑽を積まれ、本文学賞に応募していただきたい。次回も多くの作品に出会えることを楽しみにしている。

（こつがい とおる／名桜大学国際学部 教授）

「第4回「令和五年度」名桜文学賞の作品審査を終えて」

吉川 安一

受賞者の皆さんおめでとうございます。

今回も「詩部門・短歌部門・エッセイ部門」を審査する機会に恵まれた。どの作品も、社会や自然に対する書き手の鋭い観察、分析、解釈を通して丁寧に創作されており、優劣を付けるのに難渋した。エッセイ部門では、題材／テーマと表現スタイルの融合性が生む作品の力や可能性を改めて認識させられた。

エッセイ部門の最優秀賞は審査委員が全員一致して「十ぬ指やいぬたきやねえらん」を選んだ。昭和三十年代、戦後暫くしてからの沖縄の地域社会における貧しいながらも扶助援助の社会的思想がある風景が、作者が祖母や祖父と交わってきた「会話」を通して描かれている。「祖母が教えた黄金言葉」の数々が日常の描写のなかで蘇り、言葉の意味や大切さが読み手みに伝わってくる。方言による会話とそれに日本語訳をつけて示すスタイルは、方言の話者が少なくなりつつある沖縄において言葉や文化を継承させていくという意味でも、また本土の人を含めたより広い層の読み手に読んでもらうという意味でも重要なスタイルであろう。また可能な限り「会話」だけでエッセイを展開させるスタイルは、生身の人間同士による言葉のやり取りのもつ力、なぜ言葉が「黄金」なのかを改めて気づかせてくれる。貧しさや困難な暮らしのなかで多くの人々が会話や

対話により救われてきたことを想起させる。

またこの作品の中の「黄金言葉」は、昭和三十年代の沖縄の人々が求めても手にすることの出来なかった、平和主義を規定した九条や国民の生存権と国の生活保障の義務を謳った第二十五条をもつ日本国憲法と根底で繋がるのではと考えさせられた。そして作品のタイトルでもある「十ぬ指やいぬたきやねえらん」という沖縄の古いことわざは現在の「多様性の尊重」という考え方と重なっていると考えている。

題材／テーマと表現スタイルの融合性という視点から、作品「この島の自然を思う」にも触れておきたい。この作品は、東京から沖縄を訪れた作者が、沖縄の沿岸の自然の姿を観察、経験し、それを生態学における自然の「連続性」という概念と関連づけて描写、説明したものだ。同時に失われていく沖縄の自然への懸念を示している。

リュウキュウマツやハスノハギリの林を通り抜け、地面を這うグンバイヒルガオを超え、白い砂に辿り着くまでの連続的描写は、「本来、自然には境界というものがない」という生態学の認識に重ねられていく。また慶佐次湾のマンローマングローブ林をとの出会いを、「圧倒され」「どこに岸があるのか、どこが川であり、どこからが海なのか」分からなかったとしながら、そこは「陸と海が出会う場所であるエコトーン」「このエコトーンが自然から境界というものを取り除いている」という生態学の理解へと繋げている。そして護岸工事などに象徴される開発によって「エコトーンが失われつつある」ことに警鐘を鳴らし、まず「この島の自然を思うこと」の大切さが指摘されている。

この作品に登場する慶佐次の集落は、私が教職を勤めていた若い頃、毎日の通勤路の途中にあった思い出深い集落である。またマンガローブは、私の故郷・鳩間島には生育していなかったが、対岸の西表島で生育しており、クリ舟の帆や魚網の染料などとして鳩間島の人々の暮らしにも欠かせないものだったことを思い出している。エッセイが、そして文学が、地球的環境問題の解決にどう関われるのかを考えさせられた。

これまで名桜文学の論文審査に携わることが出来たことに感謝をしています。更に名桜文学の大樹が沖縄県や世紀の大地で生育成長することを念じます。

（よしかわ やすいち／名桜大学 名誉教授）

【俳句部門】

屋良 健一郎

俳句部門はおおしろ氏、西原氏、私の三名で選考を行った。最優秀賞は「地球忌」。終末観が不気味さと美しさを生む。〈密葬の柩の部屋に蝉の声〉は棺のある部屋の静寂と屋外の蝉の声のにぎやかさの対比が鮮やかで、それゆえ、映像や音声がたちあがる。〈早天に忌の連続の暦あり〉は現代の水が少ない地域を想像してもいいが、私は、たとえば歴史上のひでりによる飢饉などを連想した。〈刑死後の極暑に熔ける鉄条網〉は文字通り読むと刑務所だろうが、米軍基地をイメージすると、また違った味わいがある。

俳句部門は四作が奨励賞となった。出産をテーマにした創作は、ともすると主観が入り過ぎて甘くなることもあるが、「島にうまれる」は出産を冷静に詠む故に印象的。〈夏怒涛子宮から出て褒めらるる〉の夏怒涛は海岸に打ち寄せる波。向こうからこちらへ寄せる波に乗って、赤ちゃんがこの世に到達する。その神秘を淡々と詠むことで詩としての力が生まれている。〈エイサーや曾祖母となる祖母の顔〉、出産で立場が変わるといえるのはありがちな描き方なのだけれど、この句ではエイサーが効いている。古くから続くエイサーを出すことで、先祖から受け継がれてきた命を、いま、ここで感じているし、受け継がれてゆく命を見通している。この句を読んだ後に〈胎動のなほ鳴響^{とよ}みけり沖縄忌〉に戻ると感慨深い。「ジユゴンと恩納^{うんな}森^{むらい}」は沖縄の今を皮肉たつぷりに詠んだ作で興味深い。ただ、助詞を省いたことによる舌足らずな感じが目立つのが残念。「鶯

の初音」は〈芭蕉布を亡母と手織りし夕間暮れ〉の余情が良い。〈エイサーの鐘反響す壕の洞〉も、壕の外と中の時間の流れの違い（壕の中の止まった時間）を感じさせて印象的だが、「壕の洞」は同じような言葉が重なって、やや気になる。「白き骨」は〈冴返り冴返りつつ基地負担〉が行きつ戻りつするばかりで解決しない基地問題の現状を指摘して爽快。〈名月の指図か闇の司令劇〉も面白い発想。「司令劇」という言葉が読者に伝わるかどうかは気になる。

（やら けんいちろう／名桜大学国際学部 上級准教授）

【俳句部門】

おおしろ 建

俳句の募集は今回で五回目である。俳句部門の応募は十八作品であった。前回の応募が三九作品であったから、応募数が減って寂しい限りである。高校生の応募が半数あった。若い感性は伸びしろが大きい。これからもしどし応募して欲しい。

最優秀賞「地球忌」安里 和幸（あさと かずゆき）

歳時記に「地球忌」と足す天使かな

刑死後の極暑に熔ける鉄条網

密葬の柩の部屋に蟬の声

五句から三句。作品五句は「刑死」「密葬」「忌の連続」「都市の亡ぶ」「地球忌」など死や滅亡をテーマにしている。一句目。自然災害や戦争などで地球環境は悪化し、地球はとうとう死んでしまったようだ。天使が哀れみの目つきで歳時記に「地球忌」と足したという。地球を悪化し死滅させた人類の愚かさを揶揄した句であろうか。二句目。鉄条網は刑務所を囲んでいるのか。処刑を悼み極暑の中で涙を流すかのように鉄条網は熔けたという。三句目。秘かに葬ることが「密葬」。人気のない部屋に置かれた柩。蟬の鳴き声だけが、静かに染み渡る。

奨励賞「島に生まれる」外田 さし（ほかだ さし）

出産がテーマの五句。《岩田帯巻くうりずんの息深く》。妊婦が胎児の保護のために腹に巻くのが「岩田帯」。いろんな物が芽吹くうりずんの季節の中で、胎児を愛おしみ息を深く吸う。

《胎動のなほ鳴響みけり沖縄忌》。慰霊の日である「沖縄忌」の日に、母体内の胎児が共鳴するかのように動きだす。平和を祈るとともに、新しい物事の始まりを感じさせる句である。

《夏怒濤子宮から出て褒めらるる》。夏の荒れ狂う大波のような出産であつたのだろうか。よくぞ産まれてきてくれてありがとう。よく頑張ったねと褒められる光景が浮かぶ。

奨励賞「ジユゴンと恩納森」田中 直次（たなか なおつぐ）

《開鐘（ケージョウ）か三線バチはジユゴン骨（ぼね）》。三線の名器である開鐘（ケージョウ）を弾くバチが、ジユゴンの骨であるという悲哀。辺野古の埋立で亡くなったジユゴンを悼んでいるのだろうか。

《ナビー哭くバードストライク恩納森》。ナビーは女流歌人である恩納ナビーのことか。そのナビーが慟哭している。それは、鳥が人工物に衝突する事故「バードストライク」が、あつたからだという。自然豊かなはずの恩納の森。そこにある人工物は基地のことだろうか。

《世界悲慘クイナの口にUSA缶》。ヤンバルクイナが棲む森は世界自然遺産に登録されている。だが、アメリカ製の空き缶がクイナの口にある。その状態は「世界悲慘」だと皮肉る。

奨励賞「鶯の初音」花木 詩香（はなき しいか）

《親ごころ伝ひ歩きと初音かな》。鶯がその年に初めて鳴き声をあげた。それは親ごころを支えとして幼い鶯が伝え歩きをするかのような鳴き声であった。

《芭蕉布を亡母と手織りし夕間暮れ》。夕方になり辺りが薄暗くなって、よく見えない頃になると懐かしく思い出す。亡くなった母親と一緒に夕暮れまで芭蕉布を手織りしたことを。

《竹節虫や連理の枝となりてをり》。竹節虫（ナナフシ）は木の枝に擬態するのが特徴。その姿を捉えて、男女の深く睦ましい契りの喩えである「連理の枝」としたのが手柄である。

奨励賞「白き骨」本村 隆信（もとむら たかのぶ）

《冴え返り冴え返りつつ基地負担》。沖縄には基地負担が、手を替え品を替えて次々と襲い掛かる。そのさまを春になっても寒さがぶり返す「冴え返り」を重ねることで皮肉っている。

《名月の指図か闇の司令劇》。名月がこうこうと辺りを照らしている。しかし、一方では深い闇が広がっている。沖縄戦では軍隊を指揮する司令官が、県民を死の劇場へと追いやった。それが「闇の司令劇」である。けっして名月が指図したのではない。

《秋冷や洞窟に残れり白き骨》。沖縄戦で人々は自然壕である洞窟に隠れた。そこでは多くの人が亡くなった。晩秋に近くなると冷ややかさが増す。洞窟に残った骨は白さが冴えるだろう。

（おおしろ けん／俳人）

【琉歌部門】

波照間永吉

今年の応募作品をひとわたりみて、昨年以上の粒選りな琉歌が並んでいることがすぐに分かった。お一人の応募作を四く五首のまとまりでみると、それぞれの作者のテーマの多様性や力量はいよいよ鮮明になったが、そのどれを受賞作とするかを決定することは容易でなかった。これまでの中でもっとも優れた作品の多い年ではなかっただろうか。それだけに私としては選考に苦しむ場面があり、最優秀賞と奨励賞の三作品にはほとんど差はないというのが実感である。受賞作が決定されて応募された方々のお名前が発表されたところで、その思いが単なる迷いではなかった、と妙な安心感を得たことであつた。

今年度は十二名の応募者があつたのであるが、過去の受賞者を含めて昨年から連続しての応募者が半数以上であつた。それはこれらの方々が「名桜文学賞」を評価して下さつてのことと、深く感謝申し上げたい。一方、そのことは、新しい応募者がなかなか現れないという琉歌界の現実もまた明らかにしている。琉歌に親しむ人々が多く現れてきて欲しいと切に願う。

選考の基準としては、例年のように、音数律を守ることは当然のこととして、その上で、歌のしらべや、琉歌らしい言葉づかい、言葉の美しさ、語法の妥当性、そして作品世界の美しさなどをみた。琉歌の読み（シマクトウバの表記）を徹底して欲しかったが、今回はその点はあまり厳格にはみなかった。

最優秀賞には宮城里子氏の「黄金色くがにいろかわてい 命育めいすだちしでいる 飛び立ちゆる蝶はびる しばし待たな」が選ばれた。この作者は自身の喜怒哀楽そのものではなく、自然など属目の世界に材を求め優れた琉歌を詠んでいるのが私の印象に残っている。この作品ではオオゴマダラの羽化がモチーフとなっている。オオゴマダラのサナギは黄金色で、そのことがよく話題にされる。その黄金色のサナギから貴婦人のようなオオゴマダラが誕生する。その瞬間が「命育めいすだちしでいる」時である。それを目にした感動が「しばし待たな」という一句に籠められているとみた。

奨励賞には大城和子氏の「露ちゆかみて咲さちよる 彼岸花ひがはな出いちや 一時ちゆとちかなた語らなや 歩あゆみ止とみて」と前原武光氏の「サワフジぬ花はなに 一夜宿借ちゆゆるやどやり 連ちりてれて消え落うちる 露ちゆぬみだの涙」が選ばれた。大城氏の作品は、独特の美しさで見る人を魅了する彼岸花の、朝露を受けてより一層魅力を増した姿が取り上げられている。思わず歩を止めて語りたくなったのは、そこに懐かしい人の面影をみたからであろうか。深い味わいのある歌である。

前原氏は旺盛に活動する優れた琉歌人である。前原氏の作品は夜に花開き朝には散り落ちるサワフジに宿を借りる露をモチーフにして、はかない恋の世界を思わせる一首である。一夜限りの花に宿を借りる露はその花よりはかないもので、それは人を恋うて流す涙なのだろう。近世の琉歌には多くの優れた虚構の作品があった。現代の琉歌にもそのような虚構の作品が求められてもよいはずである。前原氏の作品を読みながらそのようなことを考えた。お二人の作品はいずれも美しい心象を現出させていて、歌人の豊かな感性と力量の確かさをあらためて思ったことであつた。

（はてるま えいきち／名桜大学大学院国際文化研究科博士後期課程 教授）

照屋 理

琉歌部門は昨年度、それまでで最多の十一件のご投稿があり、次年度以降への期待を記したが、今年度はそれを上回る十二件のご投稿があった。内容も８８８６の音数律で詠まれる短歌形式の琉歌五一首があつたのに加えて、８８８・・・６と、８音が三回以上繰り返される長歌形式での琉歌四首も、今回はじめて投稿があつた。多彩かつ技巧的な作品群を目の前に審査が例年より充実するとともに、選考・順位付けも最も難しい年となった。

以下、最優秀一首、奨励賞二首を掲げる（本文、ルビは投稿原稿通りに表記した）。

二〇二三年度最優秀の作品は、「黄金色（くがにいろ）かわてい命育（ぬちすだ）ちしでいる飛（とう）び立（た）ちゆる蝶（はびる）しばし待（ま）たな」が選ばれた。黄金色に変わつて命を育み、脱皮して飛び立つ蝶をしばし待とう、というほどの歌意である。

本作品は、まず第一句「黄金色かわてい」に心が留まり、そのまま読み進めていくと、蝶の脱皮、羽化という過程をみつめた歌であることがうかがえる内容となっている。詠い込まれている蝶種はオオゴマダラであろう。日本でも最大種に含まれるこの蝶のサナギが、美しい金色となることはよく知られている。この作品は結句まで読んだ瞬間、実は第一句が鍵となり、金の雫がこぼれるように下がつているサナギの情景が浮かびあがる仕掛けとなっている。

奨励賞は二作品が選出された。一首目「露（ちゆ）かみて咲（さ）ちゆる彼岸（ひがん）花（はな）出会（いちゃ）い一時（ちゆとうち）語（かた）らなや歩（あゆ）み止（と）めて」は、露

をいただき咲いている彼岸花と出会い、片時語りたいた歩みを止めて、という歌意である。

まず第一句目の「露」であるが、それはいわゆる朝露であろうか、それとも別の比喩であろうか。本歌の詠み手は、どこかへ向かう途中、その彼岸花を見つけて歩みを止め、片時でも語りたいたと綴る。何を語りたいたのかは示されないが、九月のお彼岸の頃に咲くとされるこの花の存在が、静かに読者の想像を導いてゆく。風景画のように穏やかな上句と、生動を感じさせる下句との対比が、彼岸と此岸の邂逅を感じさせる。

奨励賞二首目、「サワフジの（ぬ）花（はな）に一夜（ちゆゆる）宿（やどう）借（か）やり（やい）連れて（ちりてい）消え落ちる（ちうてい）露（ちゆ）の（ぬ）涙（なみだ）」は、サワフジの花に一夜の宿を借り、のべつ流れ落ちる露の涙、というほどの歌意である。

サワフジは琉球列島に広くみられる花木で、その幹からいくつもの蕾をつけた1mほどの花房を複数下げている。夏の夜、それらの蕾が下方へ向かって花を咲かせる。その様子からサガリバナとも称されるという。またその花は一夜のみのもので、夜が明けるまでに落ちてしまうことが多い。歌詞全体から、サワフジの木陰を借りるというより、サワフジに寄り添ってほしい、人知れず溢れる感情を共有している様子が浮かぶ。あるいはまた、絶え間なく流れ落ちる涙と、花房に次々に咲いては落ちて行く一夜花とが相俟って見えようか。

以上が、上位三首の評言である。

今回も五〇首を越える作品を評価することとなったが、上に挙げた三首以外に興味深い作品や心引かれる作品が数多くあった。また今年度はオモロ口語を用いた作品が散見され、個人的に特に

知的刺激をいただいた。ぜひまたご投稿いただきたい。

なお今回、若手によるとみられる投稿作品はなく残念であった。名桜文学賞の琉歌部門は、やはり方言の壁が厚いと感じられるかもしれない。しかし、日常会話で用いられる琉球語・方言と琉歌などの古典的琉球語や表現は異なりがある。つまり、方言で日常的な会話が仮に出来なくとも、古典作品に目を通すことで琉歌を学ぶこと、詠むことは可能となるはずである。

若手の皆さんによる更なるご投稿を、心より期待している。

(てるや まこと／名桜大学国際学部 教授)

作品募集

次なる才能をお待ちしています！



第4回(令和5年度)

名桜文学賞

■応募資格

- ① 沖縄県内高等学校在学生
- ② 沖縄県内大学、短期大学および高等専門学校、専門学校在学学生
- ③ 一般社会人(沖縄県内在住者)

■応募期間

2023年9月4日(月)～10月27日(金) [消印有効]

■応募要領

①「小説部門」

- 400字詰め原稿用紙30～50枚程度。(原稿用紙使用の場合は必ずA4サイズを使用すること。)ワープロ原稿は、1行30字×40行を指定(入稿時のみ)の範囲内に統一して提出する。応募は1人1篇とする。
- 原稿に：部門名、タイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 原稿には必ず黒い複製用紙(Copy用紙)を入れて、応募用紙に貼る。

②「短歌部門」

- 原稿は5冊以下の募集とし、400字詰め原稿用紙1枚に5句(1組)を記す(募集3)。ワープロ原稿は、行数・行数の設定は自由とするが、1枚に5句を記入すること、応募は1人1組(5句以内)とする。
- 原稿に：部門名、5冊をふりまじりとしたタイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。

③「俳句部門」

- 原稿は5冊以下の募集とし、400字詰め原稿用紙1枚に5句(1組)を記す(募集3)。ワープロ原稿は、行数・行数の設定は自由とするが、1枚に5句を記入すること、応募は1人1組(5句以内)とする。
- 原稿に：部門名、5冊をふりまじりとしたタイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。

④「俳句部門」

- 原稿は5冊以下の募集とし、400字詰め原稿用紙1枚に5句(1組)を記す(募集3)。ワープロ原稿は、行数・行数の設定は自由とするが、1枚に5句を記入すること、応募は1人1組(5句以内)とする。
- 原稿に：部門名、5冊をふりまじりとしたタイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。

■賞および賞金

- ①小説部門 最優秀賞(賞金10万円)1名
 - ②詩部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
 - ③短歌部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
 - ④エッセイ部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
 - ⑤俳句部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
 - ⑥短歌部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
 - ⑦上記6部門 奨励賞(記念品)若干名
- ※高橋校生は賞金相当額の図書カードとします。

- 応募作品は未発表の作品(新聞・雑誌・同人誌やホームページ・ブログ・SNSなど)で発表していない作品に限ります。
- 同部門に二部門以上で作品を応募する場合は、同一部門への応募はできません。
- 作品はに名桜文学賞で最優秀賞を受賞した作品は同一部門への応募はできません。
- 投票者候補についての問い合わせには、一切応じません。
- 当選の発表は、当選者本人または関係者に直接連絡しての連絡となります。
- 応募後、作品の修正や変更はできません。
- 当選後、作品の発表は自由となります。
- 当選作品に際しては、投票者の住所に限り投票用紙に「の」の欄を記入し、投票者からの投票の計票結果を必ず送付することとさせていただきます。

②「詩部門」

- 400字詰め原稿用紙3枚以内(募集3)。ワープロ原稿は、1行20字×20行の範囲内に統一して提出すること、応募は1人1組(5句以内)とする。
- 原稿に：部門名、タイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 原稿には必ず黒い複製用紙(Copy用紙)を入れて、応募用紙に貼る。

④「エッセイ部門」

- 400字詰め原稿用紙1枚に1行(15字)を記す(募集3)。ワープロ原稿は、行数・行数の設定は自由とするが、1枚に1行(15字)を記入すること、応募は1人1組(5句以内)とする。
- 原稿に：部門名、タイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 原稿には必ず黒い複製用紙(Copy用紙)を入れて、応募用紙に貼る。

⑥「短歌部門」

- 原稿は5冊以下の募集とし、400字詰め原稿用紙1枚に5句(1組)を記す(募集3)。ワープロ原稿は、行数・行数の設定は自由とするが、1枚に5句を記入すること、応募は1人1組(5句以内)とする。
- 原稿に：部門名、5冊をふりまじりとしたタイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 原稿には必ず黒い複製用紙(Copy用紙)を入れて、応募用紙に貼る。



■作品送付先および問い合わせ先
名桜大学附属図書館 名桜文学賞作品係
〒905-8585 名桜大学文学部 1220-1 電話: 0980-51-1062

名桜大学HP: <https://www.meio-u.ac.jp/>

応募用紙

第四回（令和五年度） 名桜文学賞表彰式を開催

令和六年二月十日（土）、本学附属図書館東江康治記念講堂において、第四回（令和五年度）名桜文学賞表彰式を開催しました。

「名桜文学賞」は第十五回まで続いていた「名桜大学懸賞作品コンクール」を名称変更（衣替え）し、第四回目を迎える今回は六部門（小説、詩、短歌、エッセイ、俳句、琉歌）で応募総数七八編の作品が寄せられ、その中から厳正な審査の結果、各部門の受賞作（最優秀賞：五作品、奨励賞：一五作品）が選ばれました。

表彰式当日は、受賞者をはじめとする関係者を含め、約三〇人が参加しました。

表彰式に先立ち小番達館長から開会の挨拶があり、次に出席した審査員全員から講評が

行われました。その後、参加した受賞者一人ひとりに賞状及び副賞を授与しました。

表彰式の最後には、永年にわたり審査員を務めていただいた吉川安一氏（名桜大学名誉教授）に感謝状と花束が贈呈され、その功績をたたえました。

また、表彰式終了後には審査員と受賞者が意見交換等を行う場面も見られ、新たな文学の可能性を模索する場となりました。

今後も名桜文学賞は、文学の発展と才能の発掘に努め、さらなる創造と交流の場として発展していくことを目指してまいります。ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



名桜文学賞表彰式を終えて。参加者一同

第四回名桜文学賞受賞作品集

(名桜大学附属図書館報 特別号 令和四年度)

発行日

令和六年三月二十九日

編集 名桜大学附属図書館

発行 公立大学法人名桜大学

〒九〇五-1858

沖縄県名護市字為又一二三〇-1

印刷

株式会社 国際印刷

名桜大学附属図書館報 特別号 令和5年度

